

五燈會元

二

住菴^四 緣化^五 相 瀘水臺^七 法霄藤 虎 法堂 鶴^八 華嚴^九
 箭 送畫^十 侍者^三 衣鉢^{十四} 神^{十六} 神^{十七} 蛤蜊^六 鸚^九 草春藤^{廿九}
 胡孫 侍者^三 行者^三 洋瓶 雲塔 沙弥^{三五} 鄉信^三 青梅 車
 師讀^{廿七} 圖覺經^{三八} 採藥^四 阿 岩 般若 指花冠 商 火^{四六}
 如竟 剪尺 耕子^四 亦^五 掃帚^{廿十} 龜瓦 將^廿 素子^{五二}
 應化

法華經^{廿二}
 法華經^{廿二}

不抄心知心知者七識也下心字八識淨分真心也為心王宗

人推智中云不抄智中乃差別智乃根本智乃文殊也差別智乃普賢也

等直仙 無去無偽也 知法本 東抄法本清無法經云心為法本

慈典焉 東抄才八慈悲教化以無為法 編空隄 東抄編滿空虛布大陰云

鏡像現三業外人化四衢 東抄云摩訶般若經才八諸天子譬言如工幻師於四衢道中化

作佛及四部衆於中說法於諸天子意云何是中有說者有聽者有知者不諸天子言大

德不也須菩提語諸天子一切諸法如幻無說無聽者無知者

不住空邊盡當照有中無不出空有因未時 東抄云不住空邊盡不住著空寂之中也

有無可以觀照當体即空也不出空有之因未當与空有俱則謂之則無言也

識見暫收翻 從前行空沉空滯寂者暫時时间劫知非也 會真定心量自初心至七地有功用

故妄心息 迷往微 迷昧之地即生死也 楚老師自稱也 法相 自己之也

五燈會元卷第二

四祖大醫禪師旁出法嗣第一世

牛頭山法融禪師

四祖下二世

融禪師法嗣

牛頭山智巖禪師

鍾山曇璿禪師

四祖下三世

巖禪師法嗣

牛頭山慧方禪師不列章次

四祖下四世

方禪師法嗣

牛頭山法持禪師不列章次

四祖下五世

心禪師法嗣

牛頭山智威禪師

四祖下六世

威禪師法嗣

牛頭山慧忠禪師

安國玄挺禪師

天柱崇慧禪師

鶴林玄素禪師

四祖下七世

忠禪師法嗣

佛窟惟則禪師

鶴林素禪師法嗣

徑山道欽禪師

四祖下八世

佛窟則禪師法嗣

寺

天台雲居智禪師

徑山欽禪師法嗣

鳥窠道林禪師

五祖大滿禪師旁出法嗣第一世

北宗神秀禪師

嵩嶽慧安國師

蒙山道明禪師

資州智儂禪師不列章次

五祖下二世

北宗秀禪師法嗣

玉臺巨方禪師

中條智封禪師

降魔藏禪師

壽州道樹禪師

嵩山普寂禪師不列章次

嵩嶽安國師法嗣

徇先仁公禪師

嵩嶽破三頤墮和尚

嵩嶽元珪禪師

資州旻禪師法嗣

資州處寂禪師不列章次

五祖下三世

嵩山寂禪師法嗣

終南山惟政禪師

破竈墮和尚法嗣

嵩山峻極禪師

資州寂禪師法嗣

益州無相禪師不列章次

五祖下四世

無相禪師法嗣

保唐無住禪師

博陵王為崔浩
也雖然玄暉天后
之末年誅二張而
封博陵郡王可
為中宗初年也
太宗顯慶二
年大梁同
心卷不能無
此年陽遠之疑後
皆令人幸焉

什

物

統紀顯慶二年金
牛頭山法融禪
師得法於五
祖一相才一世應
八上枝仲法記

大部般若 日譯
非玄法一百卷

六祖大鑒禪師旁出法嗣第一

西域崛多三藏

韶州法海禪師

吉州志誠禪師

匾擔曉了禪師

洪州法達禪師

壽州智通禪師

江西志徹禪師

信州智常禪師

廣州志道禪師

永嘉玄覺禪師

司空本淨禪師

婺州玄策禪師

河北智隍禪師

南陽慧忠國師

河澤神會禪師

六祖下二世

南陽忠國師法嗣

耽源應真禪師

河澤會禪師法嗣

蒙山光真禪師

磁州法如禪師不列章次

六祖下三世

磁州如禪師法嗣

荆南惟忠禪師亦名南印不列章次

六祖下四世

荆南忠禪師法嗣

遂州道圓和尚不列章次

六祖下五世

遂州圓和尚法嗣

圭峯宗密禪師

四祖大醫禪師旁出法嗣

牛頭山法融禪師者潤州延陵人也姓韋氏年十九通經史

尋閱大部般若 真空忽一日歎曰儒道世典非究竟法般

陸王 唐書列傳曰崔玄暉情懷人長

年出后收天官注 命後封博懷侯王

或引年可考回

境緣心發時

東抄云境乃六塵

也或云終日之念而

一業所談不言

一曰境色初發

一曰東抄云心量

曰心乃八識之事也

量乃七識也思量名

意也知乃六識也

別名意識心言心

意識辨一也同照

上則無一物東抄

本面光返照也

意緣

意緣

意緣

意緣

意緣

意緣

意緣

意緣

意緣

意緣

意緣

意緣

意緣

意緣

浩正觀出世舟舟隱茅山投師落髮後入牛頭山幽棲寺北

巖之石室有百鳥銜花之異唐貞觀中四祖遙觀氣

有奇異之人乃躬自尋訪問寺僧此間有道人否曰出家兒那

箇不是道人祖曰阿那箇是道人僧無對別僧曰此去山中十

里許有一懶融見人不起亦不合掌莫是道人麼祖遂入山見

師端坐自若曾無所顧祖問曰在此作甚麼師曰觀心祖曰觀

是何人心是何物師無對便起作禮曰大德高樓何所祖曰貧

道不決所止或東或西師曰還識道信禪師否祖曰何以問他

師曰嚮德滋久莫一禮謂祖曰道信禪師貧道是也師曰因何

降此祖曰特來相訪莫更有宴息之處否師指後面曰別有小

庵遂引祖至庵所遠庵唯見虎狼之類祖乃舉兩手作怖勢師

曰猶有這箇在祖曰這箇是甚麼師無語少選祖却於師宴坐

石上書一佛字師觀之竦然祖曰猶有這箇在師未曉乃稽首

請說真要祖曰夫百千法門同歸方寸河沙妙德總在心源一

切戒門定明慧明神通變化悉自具足不離汝心一切煩惱業

障本來空寂一切因果皆如夢幻無三界可出無菩提可求人

與非人性相平等大道虛曠絕思絕慮如是之法汝今已得更

無闕少與佛何殊更無別法汝但任心自在莫作觀行亦莫澄

心莫起貪嗔莫懷愁慮蕩蕩無礙任意縱橫不作諸善不作諸

惡行住坐卧觸自遇緣總是佛之妙用快樂無憂故名爲佛師

曰心既具足何者是佛何者是心祖曰非心不問佛問佛非不

心師曰既不許作觀行於境起時心如何對治祖曰境緣無好

醜好醜起於心心若不強名妄情從何起妄情既不起真心任

徧知汝但隨心自在無復對治即名常住法身無有變異吾受

璨大師頓教法門今付於汝汝今諦受吾言只住此以向後當

法五人達者紹其化祖付法訖遂返雙峯終老師自爾法席

空

空

空

唐書

又無所緣竟了知生月判万境發呈思心緣

前境之境... 不離... 作境也故下文云... 心或心為不覺終至正覺... 為不則

大盛唐永徽中... 師往丹陽緣化去山八十里躬負米

一石八斗朝往暮還供僧三百二時不闕三年邑宰... 前元善請

於建初寺講大般若經聽者雲集至滅靜品地為之震動講罷

歸山博陵王問師曰境緣色發時不言緣色起云何得知緣乃

欲息其起師曰境色初發時色境二性空本無知緣者心量與

知同照本發非發爾時起自息抱暗生覺緣心時緣不逐至如

未生前色心非養育從空本無念想受言念生起發未曾起豈

用佛教令問曰閉目不見色境慮乃便多色既不關心境從何

處發師曰閉目不見色內心動慮多幻識假成用起名終不過

知色不關心心亦不關心隨行有相轉鳥去空中真問曰境發

無處所緣覺了知生境謝覺還轉覺乃變為境若以心曳心還

為覺所覺從之隨隨去不離生滅際師曰色心前後中實無緣

此境一念皆疑忘誰能計動靜此知曾無知知知緣不會動靜

本形何須求域外前境不變謝後念不來今求月執玄影言

跡逐飛禽欲知心本性還如視夢裏譬之六月冰處處皆相似

避空終不脫求空復不成借問鏡中像心從何處生問曰恰恰

用心時若為安隱好師曰恰恰用心時恰恰無心用曲譚名相

勞直說無繁重無心恰恰用常用恰恰無今說無心處不與有

心殊問曰智者引妙言與心相會當言與心路別合則萬倍乖

師曰方便說妙言破病太乘道非關本性譚還從空化造無念

為真常終當絕心路離念性不動生滅無乖悞谷響既有聲鏡

像能回顧問曰行者體境有因覺知境二前覺及後覺并境有

三心師曰境用非體覺覺罷不應思因覺知境二覺時境不起

前覺及後覺并境有三遲問曰住定俱不轉將為止三昧諸業

東抄云... 此知自無知... 緣

東抄云... 不離... 緣

東抄云... 不離... 緣

東抄云... 不離... 緣

東抄云... 不離... 緣

東抄云... 不離... 緣

東抄云... 不離... 緣

東抄云... 不離... 緣

東抄云... 不離... 緣

東抄云... 不離... 緣

東抄云... 不離... 緣

東抄云... 不離... 緣

者博法... 將謂... 子細... 方便... 散穢... 還如... 照用... 心應... 心用... 真擇... 方為... 見師... 三照... 第八... 智鏡... 有內... 何能... 無同... 便多... 復相... 曰別... 心量... 且勞... 曰前... 無幻... 細障... 開要... 王實...

分一不... 說無... 細習... 徐徐... 相生... 風來... 波浪... 轉欲... 靜

水還平... 更欲... 前途... 說恐... 畏後... 心驚... 無念... 大獸... 吼性... 空霜... 雹星

散穢草... 推縱... 橫飛... 鳥落... 五道... 定紛... 綸四... 魔不... 前却... 既如... 猛火... 燎

還如利... 劍斫... 問曰... 賴覺... 知萬... 法萬... 法本... 來然... 若假... 照用... 心只... 得

照用心... 不應... 心裏... 事師... 曰賴... 覺知... 萬法... 萬法... 終無... 賴若... 假照... 用

心應不... 在心... 外問... 曰隨... 隨無... 揀擇... 明心... 不現... 前復... 慮心... 闇昧... 在

心用功... 行智... 障復... 難除... 師曰... 有此... 不可... 有尋... 此不... 可尋... 無揀... 即

真擇得... 闇出... 明心... 慮者... 心真... 味存... 心託... 功行... 何論... 智障... 難至... 佛

方為病... 問曰... 折中... 消息... 間實... 亦難... 安恬... 自非... 用行... 人此... 難終... 難

見師曰... 折中... 欲消... 息消... 息非... 難易... 先觀... 心處... 心次... 推智... 中智... 第

三照推... 者第... 四通... 無記... 第五... 解脫... 名第... 六等... 真偽... 第七... 知法... 本

第八慈... 無為... 第九... 徧空... 陰第... 十雲... 雨被... 最盡... 彼無... 覺無... 明生... 本

智鏡像... 現一... 業幻... 人化... 四衢... 不住... 空邊... 盡當... 照有... 中無... 不出... 空

有內未... 將空... 有俱... 號之... 名折... 中折... 中非... 言說... 安恬... 無處... 安用... 不

何能決... 問曰... 別有... 一種... 人善... 解空... 無相... 只言... 定亂... 一復... 道有... 中

無同證... 用常... 寂知... 覺寂... 常用... 用心... 會真... 理復... 言用... 無用... 智慧... 方

便多言... 亂與... 理合... 如如... 理自... 如不... 由識... 心會... 既知... 心會... 非心... 心

復相泯... 如是... 難知... 法求... 劫不... 能知... 同此... 用心... 人法... 所不... 能化... 師

曰別有... 證空... 者還... 如前... 偈論... 行空... 守寂... 滅識... 見暫... 時翻... 會真... 是

心量終... 知未... 了原... 又說... 息心... 用多... 智疑... 相似... 良由... 性不... 明求... 空

且勞已... 求劫... 住幽... 識抱... 相都... 不知... 放光... 便動... 地於... 彼欲... 何為... 問

曰前件... 看心... 者復... 有羅... 穀難... 師曰... 看心... 有羅... 穀幻... 心何... 待看... 况

無幻心... 者從... 容下... 口難... 問曰... 久有... 太基... 業心... 路差... 互間... 得覺... 微

細障即... 達於... 實際... 自非... 善巧... 師無... 能決... 此理... 仰惟... 我大... 師當... 為

開要門... 引導... 用心... 者不... 令失... 正道... 師曰... 法性... 本基... 業夢... 境成... 差

王實相... 微細... 才... 常不... 悟忽... 逢混... 沌士... 哀怨... 愍羣... 生託... 疑廣

復聞別有人... 東抄楞伽... 云分別說... 妄想心量... 菩薩心... 量自初地... 至才七地... 有功用... 故皆有... 心量... 以三事... 不成就也... 得位... 四機... 則虛空也... 心正... 受不... 知謂之... 東抄云... 不忘... 正受... 立見... 則及... 被縛... 而為... 病也... 是為... 降業... 障無... 明心... 塵方... 之一... 不... 則為... 一... 習因... 障劫... 未習... 氣煩... 心受... 故律... 而... 也... 同... 不... 心... 以... 誠... 悔... 恨... 轉... 寂... 靜... 自... 己... 心... 成... 靜... 別... 也... 辰... 自... 平... 也... 更... 欲... 則... 以... 說... 東... 抄... 云... 欲... 說... 當... 之... 前... 進... 之... 事...

性空刺目... 佛草化焉... 腹下有火光耀

大業 煬帝年号

出... 可大師言

設有... 善... 有... 亦... 子... 無... 栖... 鳳

設問抱理內常日... 死幽徑徹毀譽心不驚野老顯... 法相... 建初師辭不獲免遂命入室上首智嚴付囑法印令以次傳授... 將下山謂眾曰吾不復踐此山矣時鳥獸哀號踰月不止庵前有四大桐樹仲夏之月忽自凋落明年正月二十三日不疾而逝... 逝于雞籠山

四祖下二世

金陵牛頭山融禪師法嗣

牛頭山智嚴禪師者曲阿人也姓華氏弱冠智勇過人身長七尺六寸隋大業中為郎將常以弓挂一漚水囊隨行所至汲用累從大將征討頻立戰功唐武德中年四十遂乞出家入舒州皖公山從寶月禪師為弟子後一日宴坐觀異僧身長丈餘神姿爽拔詞氣清朗謂師曰鄉八十生出家宜加精進言訖不見

五十六

五十一

五十二

七

本

嘗在谷中入定山水暴漲師怡然不動其水自退有獵者遇之因改過修善復有昔同從軍者二人聞師隱遁乃共入山尋之既見因謂師曰郎將狂邪何為住此師曰我狂欲醒君狂正發夫嗜色淫聲貪榮冒寵流轉生死何由自出二人感悟歎息而去師後謁融禪師發明大事融謂師曰吾受信大師真訣所得都亡設有一法勝過涅槃吾說亦如夢幻夫一塵飛而翳天一芥墮而覆地汝今已過此見吾復何云山門化道當付之於汝師稟命為第二世後以正法付方禪師師住白馬栖玄兩寺又遷石頭城於儀鳳二年正月十日示滅顏色不變屈伸如生室有異香經旬不散遺言水葬焉

金陵鍾山曇瑤禪師者吳郡人也姓顏氏初謁融禪師融目而奇之乃告之曰色聲為無生之鳩毒受想是至人之坑穽子知之乎師心而審

悟玄旨尋晦迹鍾山多歷年所茅庵瓦缶

以終老。唐天祐二年二月六日恬然入定七日而滅。

四祖下三世四世不列章次

四祖下五世

金陵牛頭山持禪師法嗣

牛頭山智威禪師者江寧人也。姓陳氏。依天寶寺統法師出家。

謁法持禪師。傳授正法。自爾江左學徒皆奔走門下。有慧忠者。

自為法器。師嘗有偈示曰。莫繫念念成。生死河輪迴六趣。

海無見出長波。忠荅曰。念想由來幻。性自無終始。若得此中意。

長波當自止。師又示偈曰。余本性虛無。緣妄生人我。如何息妄。

情還歸空處。坐忠荅曰。虛無是實體。人我何所存。妄情不須息。

即汎般若船。師知其了悟。乃付以院事。隨緣化導。終於延祚寺。

四祖下六世

金陵牛頭山威禪師法嗣

五十一

五十一

五十一

五十一

五十一

牛頭山慧忠禪師者潤州人也。姓王氏。年二十三受業於莊嚴。

寺。聞威禪師出世。乃往謁之。威纔見曰。山主來也。師感悟微旨。

遂給侍左右。後辭詣諸方。巡禮威於具戒院。見凌霄藤。遇夏萎。

悴。人欲伐之。因謂之曰。勿剪。慧忠還時。此藤更生。及師回。果如。

其言。即以山門付囑。訖出居延祚寺。師平生一衲不易。器用唯。

一鐺。嘗有供僧穀。兩廩盜者窺伺。虎為守之。縣令張遜者至山。

頂謁。問師有何徒弟。師曰。有三五人。遜曰。如何得見。師敲禪牀。

有三虎。哮吼而出。遜驚怖而退。後衆請入城居莊嚴舊寺。師欲。

於殿東別創法堂。先有古木羣鵲巢其上。工人將伐之。師謂鵲。

曰。此地建堂。汝等何不速去。言訖。羣鵲乃遷巢他處。初築基有。

二神人。定其四角。復潛資衣役。遂不日而就。繇是四方學徒雲。

集。得法者有三十餘人。各住一方。轉化多衆。師有安心偈曰。人。

法雙淨。善惡兩忘。志真實。菩提道場。大曆三年。石室前挂鐺。

乾元 肅宗
永泰 代宗

檣挂衣。慈忽盛。死四年六月十五日。集僧布薩。訖命侍者。淨髮浴身。至夜有瑞雲覆其精舍。空中復聞天樂之聲。詰旦怡然坐化。時風雨暴作。震折林木。復有白虹貫于巖壑。五年春茶毗。獲舍利不可勝計。真性緣起 見于華嚴普賢行願品

宣州安國寺玄挺禪師。初參威禪師。侍立次有講華嚴。僧問真性緣起其義云何。威良久。師遽召曰。大德正興一念問時是真性中緣起。其僧言下大悟。或問南宗自何而立。曰。心宗非南北。舒州天柱山崇慧禪師者。彭州人也。姓陳氏。唐乾元初往舒州天柱山創寺。永泰元年賜額。僧問如何是天柱境。師曰。主簿山高難見。日玉鏡峯前易曉。人問達磨未來此土時。還有佛法也。無。師曰。未來且置。即今事作麼生。曰。某甲不會。乞師指示。師曰。萬古長空。一朝風月。僧無語。師復曰。聞梨會麼。曰。不會。師曰。自己分上作麼生。干他達磨來與未來作麼。他家來大似賣卜漢。

五十一

卷九

九

見汝不會。為汝錐破卦文。纔生吉凶。盡在汝分上。一切自看。僧曰。如何是解卜底人。師曰。汝纔出門時。便不中也。問如何是天柱家風。師曰。時有白雲來閉戶。更無風月四山流。問亡僧遷化向甚麼處去也。師曰。瀟嶽峯高長積翠。舒江明月色光暉。問如何是大通智勝佛。師曰。曠大劫來未曾擁滯。不是大通智勝佛。是甚麼。曰。為甚麼佛法不現前。師曰。只為汝不會。所以成不現前。汝若會去。亦無佛可成。問如何是道。師曰。白雲覆青嶂。蜂鳥步庭花。問從上諸聖有何言說。師曰。汝今見吾有何言說。問宗門中事。請師舉唱。師曰。石牛長吼真空外。木馬嘶時月隱山。問如何是和尚利人處。師曰。一雨普滋千山秀。色問如何是天柱。山中人。師曰。獨步千峯頂。優游九曲泉。問如何是西來意。師曰。白猿抱子采青嶂。蜂蝶銜花綠藥間。大曆十四年歸寂塔于山之北。

潤州鶴林玄素程自者延陵人也姓馬氏晚參威禪師遂悟性宗後居鶴林寺一日有暑者禮謁願就所居辦供師欣然而往衆皆見誅師曰佛性平等賢愚一致但可度者吾即度之復何差別之有僧問如何是西來意師曰會即不會疑即不疑又曰不會不疑底不疑不會底有僧扣門師問是甚麼人曰是僧師曰非但是僧佛來亦不着曰爲甚麼不著師曰無汝棲泊處

四祖下七世

金陵牛頭山忠禪師法嗣

天台山佛窟巖惟則禪師者京兆人也姓長孫氏初謁忠禪師大悟玄旨乃曰天地無物也物我無物也雖無物也而未嘗無物也如此則聖人如影百姓如夢孰爲死生哉至人以此能獨照能爲萬物主吾知之矣遂南遊天台隱於瀑布之西巖元和中慕道者日至有弟子可素遂築室廬漸成法席佛窟之稱自

師始也僧問如何是那羅延箭師曰中的也忽一日告門人曰汝其勉之閱二日跣趺而寂後三年塔全身于本山唐韓公撰碑今存國清寺

鶴林素禪師法嗣

杭州徑山道欽禪師者蘇州崑山人也姓朱氏初服膺儒教年二十八遇素禪師謂之曰觀子神氣溫粹真法寶也師感悟因求爲弟子素躬與落髮乃戒之曰汝乘流而行逢徑即止師遂南邁抵臨安見東北一山因問樵者樵曰此徑山也乃駐錫焉僧問如何是道師曰山上有鯉魚海底有蓬塵馬祖令人送書到書中作一圓相師發緘於圓相中著一點却封回忠國師開

猶被馬問如何是祖師西來意師曰汝問不當曰如何得旨師曰待吾滅後即向汝說馬祖令智藏來問十二時中以何爲境師曰待汝回去時有信藏曰如今便回去師曰傳語却須問取曹溪崔趙公問今欲出家得否師曰出家乃大丈夫事非

大元方與 瀑布山 天台山之別由

劫難延劫則云聖 固故中師云云力士 名之端正殊妙志力 雄猛又云金剛神

意心圖師嗣六祖

曹溪 宜林傳意儀 鳳中居人曹叔夜旌 六祖大師居之地有 又奉大德用曹侯

將相之所能為。於是省唐大曆三年代宗詔至闕下親加
瞻禮。一日同忠國師在內庭坐次見帝駕來師起立帝曰師何
以起。師曰檀越何得向四威儀中見貧道帝悅謂國師曰欲錫
欽師一名國師欣然奉詔乃賜號國一焉。後辭歸本山於
八年十二月示疾說法而逝。謚大覺禪師。

四祖下八世

佛窟則禪師法嗣

天台山雲居智禪師嘗有華嚴院僧繼宗問見性成佛其義云
何。師曰清淨之性本來湛然無有動搖不屬有無淨穢長短取
捨體自脩然如是明見乃名見性。性即佛佛即性故曰見性成
佛。曰性既清淨不屬有無因何有見。師曰見無所見曰既無所
見何更有見。師曰見處亦無曰如是見時是誰之見。師曰無有
能見者曰究竟其理如何。師曰汝知否。妄計為有即有能所乃

能正所依

得名迷隨見生解便墮生死明見之人即不然終日見未嘗見

求名處體相不可得能所俱絕名為見性曰此性徧一切處否
師曰無處不徧曰凡夫具否。師曰上言無處不徧豈凡夫而不

傳作見

具乎曰因何諸佛菩薩不被生死所拘而凡夫獨縈此苦何曾
得徧。師曰凡夫於清淨性中計有能所即墮生死諸佛大士善
知清淨性中不屬有無即能所不立曰若如是說即有能了不
了人。師曰了尚不可得豈有能了人乎曰至理如何。師曰我以
要言之汝即應念清淨性中無有凡聖亦無了不了人凡之與
聖二俱是名若隨名生解即墮生死若知假名不實即無有當
名者又曰此是極究竟處若云我能了彼不能了即是太病見
有淨穢凡聖亦是太病作無凡聖解又屬撥無因果見有清淨
性可棲止亦太病作不棲止解亦太病然清淨性中雖無動搖
與不壞方便應用及興慈運悲如是興運之處即全清淨之性

可謂見性成佛矣。繼宗踊躍禮謝而退。

徑山國一欽禪師法嗣

復禮 六子傳傳
生京兆皇甫氏
之作真字頌天
下尤傳揚又見

西湖高僧事畧師
子翰先為大詳族甲
得宗時結茅於
天竺西峯

杭州烏巢道林禪師本郡富陽人也。姓潘氏。母朱氏。夢日光入口。因而有娠。及誕。異香滿室。遂名香光。九歲出家。二十一於荆州果願寺受戒。後詣長安西明寺。復禮法師。學華嚴經。起信論。禮示以真妄頌。俾修禪。那師問曰。初云何觀。云何用心。禮久而無言。師三禮而退。屬代宗詔國一禪師至闕。師乃謁之。遂得正法。及南歸孤山永福寺。有辟支佛塔。時道俗共為法會。師振錫而入。有靈隱寺韜光法師問曰。此之法會。何以作聲。師曰。無聲。誰知是會。後見秦望山有長松。枝葉繁茂。盤屈如蓋。遂棲止其上。故時人謂之烏巢禪師。復有鵲巢於其側。自然馴狎。人亦目為鵲巢和尚。有侍者會通。忽一日欲辭去。師問曰。汝今何往。對曰。會通為法出家。和尚不垂慈海。今往諸方學佛法去。師曰。若

五灯二

卷出

十二

華火相交
嘉集云如大得
薪火加燒。盛薪
喻發智。多境
火比了境之妙。如
諸惡念作。一
日。于。是。解。往。才
四十。程。行。品
長慶 得宗

教名識辨。云此識
北宗神秀也。良策
北也。神秀於五祖下
別出一枝。在北宋
通尊國賜大通之
号也。媚亦秀也。三九
秀下相承。凡一十
二人。下五祖下也。

是佛法。吾此間亦有少許。曰。如何是和尚佛法。師於身上拈起布毛。吹之。通遂領悟。玄旨。元和。中。白居易侍郎出守。茲郡。因入山謁師。問曰。禪師住處甚危險。師曰。太守危險尤甚。由曰。弟子位鎮江山。何險之有。師曰。薪火相交。識性不得。得非險乎。又問。如何是佛法大意。師曰。諸惡莫作。眾善奉行。白曰。三歲孩兒也。解恁麼道。師曰。三歲孩兒。雖道得。八十老人。行不得。由作禮而退。師於長慶四年二月十日告侍者曰。吾今報盡。言訖坐亡。有

師名圖修者
恐是謚號

五祖之滿禪師旁出法嗣

北宗神秀禪師者。耶舍三藏誌云。良地生玄旨。通尊開封人也。

姓李氏。少親儒業。博綜多聞。俄捨愛出家。尋師訪道。至蘄州雙

峯。東山寺。遇五祖。以坐禪為務。乃歎伏曰。此真吾師也。誓心苦

節。以樵汲自役。而求其道。祖默識之。深加器重。祖既示滅。秀遂

三不異者曰一原馬臨訣至于橋王公悲送至伊水小儀陳設至山金能

盧鴻一古今

唐高祖開元初年

徵不至

新唐書字子顯

之無一字

教名識辨之此識

嵩山老子和尚九

少室山高少安可

居之乃為字字林

床先字也六脚

且之亦中身則

天札守其國師也

賢治通鑑六十五場

戶七步元年命為居

此皇南嶽後河

白道北諸郡氏前

住江陵當陽山唐武后聞之召至都下於內道場供養特加欽

禮命於舊山置度門寺以旌其德時王公士庶皆望塵拜伏暨

中宗即位尤加禮重大臣張說嘗問法要執弟子禮師有偈示

眾曰一切佛法自心本有將心外求捨父逃走神龍二年於東

都天宮寺入滅謚大通禪師羽儀法物送殯於龍門帝送至橋

王公士庶皆至葬所張說及徵士盧鴻一各為碑誄門人普寂

義福等並為朝野所重

嵩嶽慧安國師絕舍三藏詩云九女出人倫八女荆州枝江人

也姓衛氏隋開皇十七年括天下私度僧尼勸師師曰本無名

遂遁于山谷大業中大發丁夫開通濟渠饑殍相枕師乞食以

救之獲濟者眾煬帝徵師不赴潛入太和山暨帝幸江都海內

擾攘乃杖錫登衡嶽行頭陀行唐貞觀中至黃梅謁忍祖遂得

心要麟德元年遊終南山石壁因止焉高宗嘗召師不奉詔於

是徧歷名迹至嵩少云是吾終焉之地也自爾禪者輻湊有坦

然懷讓二僧來參問曰如何是祖師西來意師曰何不問自己

意曰如何是自己意師曰當觀密作用曰如何是密作用師以

目開合示之然於言下知歸讓乃即謁曹溪武后徵至輦下待

以師禮與秀禪師同加欽重后嘗問師甲子多少師曰不記后

曰何不記邪師曰生死之身其若循環無起盡焉用記為况

此心流注中間無間見漚起滅者乃妄想耳從初識至動相滅

時亦只如此何年月而可記乎后聞稽顙信受神龍二年中宗

賜紫袈裟度弟子二十七人仍延入禁中供養三年又賜摩訶辭

歸嵩嶽是年三月三日囑門人曰吾死已將屍向林中待野火

焚之俄爾萬回公來見師猖狂握手言論傍侍傾耳都不體會

至八月閉戶偃身而寂春秋一百二十八隋開皇二年上寅生

有識創起名為初

我本五從初識至

後識而斷其命

初識之謂初

時國師門人遵旨昇置林間果野火自然闍維得舍利八十粒

皇朝陳直齋藏書

內五粒色紫留於宮中至先天二年門人建浮圖焉

袁州蒙山道明禪師者鄱陽人陳宣帝之裔也國亡落於民間以其王孫嘗受署因有將軍之號少於永昌寺出家慕道頗切往依五祖法會極意研尋初無解悟及聞五祖密付衣法與盧行者即率同志數十人躡迹追逐至大庾嶺師最先見餘輩未及盧見師奔至即擲衣鉢於磐石曰此衣表信可力爭邪任君將去師遂舉之如山不動踟躕悚慄乃曰我來求法非為衣也願行者開示於我盧曰不思善不思惡正恁麼時阿那箇是明上座本來面目師當下大悟徧體汗流泣禮數拜問曰上來密語密意外還更別有意旨否盧曰我今與汝說者即非密也汝若返照自己面目密却在汝邊師曰某甲雖在黃梅隨眾實未省自己面目今蒙指授入處如入飲水冷暖自知今行者即是某甲師也盧曰汝若如是則吾與汝同師黃梅善自護持師又

五祖二

卷四

十四

問某甲向後宜往何所盧曰逢袁可止遇蒙即忘師禮謝遽回至嶺下謂眾人曰向陟崔嵬遠望杳無蹤迹當別道尋之皆以為然師既回遂獨往廬山布水臺經三載後始往袁州蒙山大唱玄化初名慧明以避六祖上字故名道明弟子等盡遣過嶺南參禮六祖

五祖下二世

北宗秀禪師法嗣

五臺山匡方禪師安陸人也姓曹氏幼無業於明福院朗禪師初講經論後參禪會及造北宗秀問曰白雲散處如何師曰不昧秀又問到此間後如何師曰正見一技生五葉秀默許之入室侍對應機無爽尋至上黨寒嶺居焉數歲之間眾盈千數後於五臺山闡化二十餘年示寂塔于本山

河中府中條山智卦禪師姓吳氏初習唯識論滯于名相為知

天台補注
境識亦自心

二 天台口之句補註平声呼者訓被為大所障必為二 為毒中鳥與所障必不復為貪欲

山公大水而漂 馬字下有所字可知平書後音似

識所詰乃發憤罷講遊方見秀禪師疑心頓釋乃辭去居于蒲
津安峯不下山十年木食澗飲州牧衛文昇建安國院居之猶
素歸依憧憧不絕使君問曰某今日後如何師曰日從濛汜出
照樹全無影使君初不能諭拱揖而退少選開曉釋然自得師
來往中條山二十餘年得其道者不可勝紀滅後門人於州城
北建塔焉

兖州降魔藏禪師趙郡人也姓王氏父為毫掾師七歲出家時
屬野多妖鬼魅惑於人師孤形制伏曾無少畏故得降魔名焉
即依廣福院明讚禪師落髮後遇北宗盛化便誓握衣秀問曰
汝名降魔此無山精木怪汝翻作魔邪師曰有佛有魔秀曰汝
若是魔必住不思議境界師曰是佛亦空何境界之有秀懸記
之曰汝與少皞之墟有緣師尋入泰山數稔學者雲集一日告
門人曰吾今老朽物極有歸言訖而逝

壽州道樹禪師唐州人也姓聞氏幼探經籍年將五十因遇高
僧誘諭遂誓出家禮本部明月山慧文為師師取乎年長求法
淹遲勵志遊方無所不至後歸東洛遇秀禪師言下知微乃卜
壽州三峯山結茅而居常有野人服色素朴言譚詭異於言笑
外化作佛形及菩薩羅漢天僊等形或放神光或呈聲響師之
學徒觀之皆不能測如此涉十年後寂無形影師告眾曰野人
作多色伎倆眩惑於人只消老僧不見不聞伊伎倆有窮吾不
見不聞無盡唐寶曆元年示疾而終

嵩嶽安國師法嗣 騰和尚了元教 見什打三十
洛京福先寺任儉禪師自嵩山罷問放曠郊鄆謂之騰騰和尚
唐天冊萬歲中天后詔入殿前仰視天后良久曰會麼后曰不
會師曰老僧持不語戒言訖而出翌日進短歌一十九首天后
覽而嘉之厚加賜賚師皆不受又令寫歌辭得布天下其辭並

義海注語即表形
以或人

上音蒙
下音似
扶桑日出
知深已
音入丸

五十八 上列二 十五 吳

敷演真理以警時俗唯了元歌一首盛行於世

嵩嶽破竈墮和尚亦稱名氏言行回測隱居嵩嶽山塢有廟甚靈殿中唯安一竈遠近祭祀不輟身殺物命甚多師一日領侍僧入廟以杖敲竈三下曰咄此竈只是泥瓦合成聖從何來靈從何起恁麼辜物命又打三下竈乃傾破墮落須臾有一人青衣戴冠設拜師前師曰是甚麼人曰我本此廟竈神久受業報今日蒙師說無生法得脫此處生在天中特來致謝師曰是汝本有之性非吾彊言神再禮而沒少選侍僧問曰某等久侍和尚不蒙示誨竈神得甚麼徑肯便得生天師曰我只回伊道是泥瓦合成別也無道理為伊侍僧無言師曰會麼僧曰不會師曰本有之性為甚麼不會侍僧等乃禮拜師曰墮也墮也破也破也後義豐禪師舉似安國師安嘆曰此子會盡物我一如可謂如即月處空無不見者難構伊語脉豐問曰未審甚麼人

夫單七

五十一

六

十一

十一

揚敵才二若能轉
物即同也末

大闡教人長水
演教此翻無故
謂不華以假學亦
言闡之信教不具

嵩嶽元珪禪師伊闕人也姓李氏幼歲出家唐永淳二年文具

戒隸閑居寺翫毗尼無懈後謁安國師頓悟玄旨遂卜廬於嶽

之龐塢一日有異人裁冠袴褶徒類而至從者極多輕步舒徐

稱謁大師師觀其形貌奇偉非常乃諭之曰善來仁者胡為而

至彼曰師寧識我邪師曰吾觀佛與衆生等吾一目之豈分別

邪彼曰我此嶽神也能生死於人師安得一目我哉師曰吾本

不生汝焉能死吾視身與空等視吾與汝等汝能壞空與汝乎

苟能壞空及汝吾則不生不滅也汝尚不能如是又焉能生死

吾邪神稽首曰我亦聰明正直於餘神詎知師有廣大之智辯

乎願授以正戒令我度世師曰汝既乞戒即既戒也所以者何

戒外無戒又何戒哉神曰此理也我聞茫昧止求師戒我身為

門弟子師即為張座秉爐正几曰付汝五戒若能奉持即應曰

能不能即曰否曰謹受教師曰汝能不媯乎曰我亦娶也師曰

非謂此也謂無羅欲也曰能師曰汝能不盜乎曰何乏我也焉

有盜取哉師曰非謂此也謂饗而福淫不供而禍善也曰能師

曰汝能不殺乎曰實司其柄焉曰不殺師曰非謂此也謂有濫

誤疑混也曰能師曰汝能不妄乎曰我正直焉有妄乎師曰非

謂此也謂先後不合天心也曰能師曰汝不遭酒敗乎曰能師

曰如上是为佛戒也又言以有心奉持而無心拘執以有心為

物而無心想身能如是則先天地生不為精後天地死不為老

終日變化而不為動畢盡寂默而不為休信此則雖娶非妻也

雖饗非取也雖柄非權也雖作非故也雖醉非媯也若能無心

於萬物則羅欲不為媯福淫禍善不為盜濫誤疑混不為殺先

後違天不為妄媯荒顛倒不為醉是謂無心也無心則無戒無

戒則無心無佛無衆生無汝及無我孰為戒哉神曰我神通亞

佛師曰汝神通十句五能五不能佛則十句七能三不能神悚

然曰

然避席跪啓曰可得聞乎師曰汝能戾上帝東天行而西七曜乎曰不能師曰汝能奪地祇融五嶽而結四海乎曰不能師曰是謂五不能也佛能空一切相成萬法智而不能即滅定業佛能知羣有性窮億劫事而不能化導無緣佛能度無量有情而不能盡衆生界是爲三不能也定業亦不牢又無緣亦是一期衆生界本無增減亘無一人能主其法有法無主是謂無法無法無主是謂無心如我解佛亦無神通也但能以無心通達一切法爾神曰我誠淺昧未聞空義師所授戒我當奉行今願報慈德効我所能師曰吾觀身無物觀法無常塊然更有何欲邪神曰師必命我爲世間事展我小神功使已發心初發心未發心不信心必信心五等人且我神蹤知有佛有神有能有不能有自然有非自然者師曰無爲是無爲是神曰佛亦使神護法師寧墮叛佛邪願隨意垂誨師不得已而言曰東巖寺之障莽

然無樹北岫有之而背非有擁汝能移北樹於東嶺乎神曰已聞命矣然昏夜必有喧動願師無駭即作禮辭去師門送而且觀之見儀衛逶迤如王者之狀嵐靄煙霞紛綸間錯幢幡環珮凌空隱沒焉其夕果有暴風吼雷奔雲掣電棟宇搖蕩宿鳥聲喧師謂衆曰無怖無怖神與我契矣詰旦和霽則北巖松枯盡移東嶺森然行植師謂其徒曰吾沒後無令外知若爲口實人將妖我以開元四年丙辰歲囑門人曰吾始居寺東嶺吾滅汝必寘吾骸于彼言訖若委蛻焉

五祖下三世

嵩山寂禪師法嗣

終南山惟政禪師平原人也姓周氏受業於本州延和寺詮澄法師得法於嵩山普寂禪師即入太一山中學者盈室唐文宗好嗜蛤蚧沁海官吏先時迺進人亦勞止一日御饌中有鱉木

契經
宗密疏云修多羅
者此云一契謂契理
契機

張者帝以其異即焚香禱之乃開見菩薩形儀梵相具足帝遂
貯以金粟檀香合覆以美錦賜興善寺令眾僧瞻禮因問羣臣
斯何祥也或奏太一山惟政禪師深明佛法博聞強記乞詔問
之帝即頒詔師至帝問其事師曰臣聞物無虛應此乃啟陛下
之信心耳故契經云應以此身得度者即現此身而為說法帝
曰菩薩身已現且未聞說法師曰陛下觀此為常邪非常邪信
邪非信邪帝曰希奇之事朕深信焉師曰陛下已聞說法竟皇
情悅豫得未曾有詔天下寺院各立觀音像以答殊休留師於
內道場累辭歸山詔令住聖壽寺至武宗即位師忽入終南山
隱居人問其故師曰吾避仇矣終後闍維收舍利四十九粒而
建塔焉

破竈墮和尚法嗣

高山峻極禪師僧問如何是修善行人師曰擔枷帶鎖曰如何

是作惡行人師曰修禪入定曰某甲淺機請師直指師曰汝問

我惡惡不從善汝問我善善不從惡僧良又師曰會麼曰不會

師曰惡人無善念善人無惡心所以道善惡如浮雲俱無起滅

處僧於言下大悟後破竈墮聞舉乃曰此子會盡諸法無生

五祖下四世

益州無相禪師法嗣

益州保唐寺無住禪師初得法於無相大師乃居南陽白崖山

專務宴寂經累歲學者漸至勤請不已自此垂誨雖廣演言教

而唯以無念為宗唐相國杜鴻漸出撫坤維聞師名思一瞻禮

遣使到山延請時節度使崔寧亦命諸寺僧徒遠出迎引至空

慧寺時杜公與戎帥召三學碩德俱會寺中致禮訖公問曰弟

子聞金和尚說無憶無念莫妄三句法門是否師曰然公曰此

三句是一是三師曰無憶名戒無念名定莫妄名慧一心不生

通論十七大曆二年
宰相杜陽解出
抗已蜀至益州遣
使詣白崖山請禪
師入城問法
古今紀要十二
崔寧鎮蜀十年

戒之惠
三學
金和尚
東抄
禪師

具戒定慧非一非三也。公曰：後句妄字莫是從心之忘乎？曰：從
女者是也。公曰：有據否？師曰：法句經云：若起精進心，是妄非精
進。若能心不妄，精進無有涯。公聞疑情盪然。公又問師：還以三
句示人否？師曰：初心學人，還令息念，澄停識浪，水清影現，悟無
念體，寂滅現前，無念亦不立也。于時庭樹鷓鴣鳴，公問師：聞否？師
曰：聞鷓鴣去已。又問師：聞否？師曰：聞公曰：鷓鴣去，無聲云何？聞師
乃普告大眾曰：佛世難值，正法難聞，各各諦聽。聞無有聞，非關
聞性。本來不生，何曾有滅？有聲之時，是聲塵自生，無聲之時，是
聲塵自滅。而此聞性，不隨聲生，不隨聲滅。悟此聞性，則免聲塵
之所轉。當知聞無生滅，聞無去來。公與僚屬大眾稽首。又問何
名第一義？第一義者，從何次第得入？師曰：第一義無有次第，亦
無出入。世諦一切有第一義，即無諸法。無性性說，名第一義。佛
言有法名俗諦，無性第一義。公曰：如師開示，實不可思議。公又

曰：弟子性識微淺，昔因公暇，撰得起信論章疏兩卷，可得稱佛
法否？師曰：夫造章疏，皆用識心，思量分別，有為有作，起心動念，
然可造成。據論文云：當知一切法從本以來，離言說相，離名字
相，離心緣相，畢竟平等，無有變異，唯有一心。故名真如。今相公
著言說相，著名字相，著心緣相，既著種種相，云何是佛法？公起
作禮曰：弟子亦曾問諸供奉大德，皆讚弟子不可思議。當知彼
等但徇人情，師今從理解說，合心地法，實是真理，不可思議。公
又問云：何不生？云何不滅？如何得解脫？師曰：見境心不起，名不
生；不生即不滅。既無生滅，即不被前塵所縛。當處解脫，不生名
無念；無念即無滅；無念即無縛；無念即無脫。舉要而言，識心即
離念；見性即解脫。離識心見性，外更有法門，證無上菩提者，無
有是處。公曰：何名識心見性？師曰：一切學道人，隨念心浪，蓋為
不識真心。真心者，念生亦不順生，念滅亦不依寂，不來不去，不

定不亂不取不捨不沈不浮無為無相活潑潑平常自在此心
體畢竟不可得無可知覺觸目皆如無非見性也公祖大衆作
禮稱讚踊躍而去師後居保唐寺而終

六祖大鑒禪師旁出法嗣

西域岷多三藏者天竺人也於六祖言下契悟後遊五臺見一
僧結庵靜坐師問曰孤坐奚為曰觀靜師曰觀者何人靜者何
物其僧作禮問曰此理何如師曰汝何不自觀自靜彼僧茫然
師曰汝出誰門邪曰秀禪師師曰我西域異道最下種者不墮
此見兀然空坐於道何益其僧却問師所師者何人師曰我師
六祖汝何不速往曹溪決其真要其僧即往參六祖六祖垂誨
與師符合僧即悟入師後不知所終

指命 廣法音義指
目之喻聖大於恒規
言義有契於
正則

韶州法海禪師者曲江人也初見六祖問曰即心即佛願垂指
諭祖曰前念不生即心後念不滅即佛成一切相即心離一切
相即佛吾若具說窮劫不盡聽吾偈曰即心名慧即佛乃定定
慧等持意中清淨悟此法門由汝習性用本無生雙修是正師
信受以偈贊曰即心元是佛不悟而自屈我知定慧因雙修離
諸物

吉州志誠禪師者本州太和人也初參秀禪師後因兩宗盛化
秀之徒衆往往譏南宗曰能大師不識一字有何所長秀曰他
得無師之智深悟上乘吾不如也且吾師五祖親付衣法豈徒
然哉吾所恨不能遠去親近虛受國恩汝等諸人無滯於此可
往曹谿質疑他日回當為吾說師聞此語禮辭至韶陽隨衆參
請不言來處時六祖告衆曰今有盜法之人潛在此會師出禮
拜具陳其事祖曰汝師若為示衆師曰嘗指誨大衆令住心觀
靜長坐不卧祖曰住心觀靜是病非禪長坐拘身於理何益聽
吾偈曰生來坐不卧死去卧不坐元是臭骨頭何為立功過師

此我云質問也之也
正也也

法華應三身
法身是盧遮那此
遍一切處
法身盧舍那此
滿
化身救世年尼此
法華仁

乃是謗經毀佛也。彼既是佛，已具知見，何用更開。汝今當知，佛知見者，只汝自心，更無別體。蓋為一切眾生，自蔽光明，貪愛塵境外緣，內擾甘受，驅馳便勞。他從三昧起，種種苦口，勸令寢息。莫向外求，與佛無二。故云：開佛知見。汝但勞勞執念，謂為功課者，何異羗牛愛尾也。師曰：若然者，但得解義，不勞誦經。邪祖曰：經有何過，豈障汝念，只為迷悟在人，損益由汝。聽吾偈曰：心迷法華轉，心悟轉法華。誦義不明，已與義作雠家。無念念即正，有念念成邪。有無俱不計，長御白牛車。師聞偈，再啓曰：經云：諸大聲聞，乃至菩薩，皆盡思度量，尚不能測於佛智。今令凡夫，但悟自心，便名佛之知見。自非上根，未免疑謗。又經說：三車大牛之車，與白牛車，如何區別。願和尚再垂宣說。祖曰：經意分明。汝自迷背，諸三乘人，不能測佛智者，患在度量也。饒伊盡思，共推轉加懸遠。佛本為凡夫說，不為佛說。此理若不肯信者，從他退席。殊不知坐却白牛車，更於門外覓三車。况經文明向汝道：無二亦無三。汝何不省。三車是假，為昔時故。一乘是實，為今時故。只教你去假歸實。歸實之後，實亦無名。應知所有珍財，盡屬於汝。由汝受用，更不作父想，亦不作子想，亦無用想。是名持法華經。從劫至劫，手不釋卷。從晝至夜，無不念時也。師既蒙啓發，踊躍歡喜，以偈贊曰：經誦三千部，曹谿一句亡。未明出世旨，寧歇累生狂。羊鹿牛權設，初中後善揚。誰知火宅內，元是法中王。祖曰：汝今後方可為念經僧也。師從此領旨，亦不輟誦持。

壽州智通禪師者，安豐人也。初看楞伽經約千餘遍，而不會三身四智。禮拜六祖，求解其義。祖曰：三身者，清淨法身。汝之性也。圓滿報身。汝之智也。千百億化身。汝之行也。若離本性，別說三身，即名有身無智。若悟三身無有自性，即名四智菩提。聽吾偈曰：自性具三身，發明成四智。不離見聞緣，超然登佛地。吾今為

五十一
二二三

忽雷澄嗣大宗神
秀禪師見祖遊
事苑一東抄云忽
雷思性燥暴云云
乎而名證乎

曰未審大師以何法誨入祖曰吾若言有法入即為狂也但
且隨方解縛假名三昧聽吾偈曰一切無心自性戒一切無礙
自性慧不增不退自金剛身去身來本三昧師聞偈悔謝即誓
依歸乃呈偈曰五蘊幻身幻何究竟回趣真如法還不淨
匾擔山曉了禪師者傳記不載唯北宗門人忽雷澄禪師撰塔
碑盛行于世其略曰師住匾擔山號曉了六祖之嫡嗣也師得
無心之心了無相之相無相者森羅眩目無心者分別熾然絕
一言一響響莫可傳傳之行矣言莫可窮窮之非矣師得無無
之無不無於無也吾今以有有之有不有於有也不有之有去
來非增不無之無涅槃非滅嗚呼師住世兮曹谿明師寂滅兮
法舟傾師譚無說兮寰宇盈師示迷徒兮了義乘匾擔山色垂
茲色空谷猶留曉了名

洪州法達禪師者洪州豐城人也七歲出家誦法華經進具之

五灯二

二

命

後禮拜六祖頭不至地祖訶曰禮不投地何如不禮汝心中必
有一物蘊習何事邪師曰念法華經已及三千部祖曰汝若念
至萬部得其經意不以為勝則與吾偕行汝今負此事業都不
知過聽吾偈曰禮本折慢幢頭奚不至地有我罪即生二功福
無比祖又曰汝名甚麼對曰名法達祖曰汝名法達何曾達法
復說偈曰汝今名法達勤誦未休歇空誦但循聲明心號菩薩
汝今有緣故吾今為汝說但信佛無言蓮華從口發師聞偈悔
過曰而今而後當謙恭一切惟願和尚大慈略說經中義理祖
曰汝念此經以何為宗師曰學人愚鈍從來但依文誦念豈知
宗趣祖曰汝試為吾念一遍吾當為汝解說師即高聲念經至
方便品祖曰止此經元來以因緣出世為宗縱說多種譬喻亦
無越於此何者因緣唯一大事一大事即佛知見也汝慎勿錯
解經意見他道開示悟入自是佛之知見我輩無分若作了解

五六七果因轉可
藏是凡夫果縛
依力故至果中而轉
之才識亦等竟
善薩猶未新故上
八二識至果中而轉
才六識七識唯念
慮亦易轉故善薩
因位可轉之
那心之藏經音義
那心此譯之龍或云
象言其大力故以喻

汝說諦信永無迷莫學馳求者終日說菩提師曰四智之義可
得聞乎祖曰既會三身便明四智何更問邪若離三身別譚四
智此名有智無身也即此有智還成無智復說偈曰大圓鏡智
性清淨平等性智心無病妙觀察智見非功成所作智同圓鏡
五八六七果因轉但用名言無實性若於轉處不留情繁興未
處那加定轉識為智者教中云轉前五識為成所作智轉第六
大圓鏡智為妙觀察智轉第七識為平等性智轉第八識為
上轉但轉其名而不轉其體也師禮謝以偈贊曰三身元我
體四智本心明身智融無礙應物任隨形起修皆妄動守住匪
真精妙旨因師曉終亡汙染名

江西志徹禪師姓張氏名行昌少任俠自南北分化二宗王雖
亡彼我而徒侶競起愛憎時北宗門人自立秀禪師為第六祖
而忌大鑑傳衣為天下所聞然祖預知其事即置金十兩於方
丈時行昌受北宗門人之囑懷刃入祖室將欲加害祖舒頸而
就行昌揮刃者三都無所損祖曰正劍不邪邪劍不正只負汝
金不負汝命行昌驚仆久而方蘇求哀悔過即願出家祖遂與
金曰汝且去恐徒眾翻害於汝汝可他日易形而來吾當攝受
行昌稟旨宵遁投僧出家且戒精進一日憶祖之言遠來禮觀
祖曰吾父念於汝汝來何晚曰昨蒙和尚捨罪今雖出家苦行
終難報於深恩其唯傳法度生乎弟子嘗覽涅槃經未曉常無
常義乞和尚慈悲略為宣說祖曰無常者即佛性也有常者即
善惡一切諸法分別心也曰和尚所說大違經文祖曰吾傳佛
心印安敢違於佛經曰經說佛性是常和尚却言無常善惡諸
法乃至菩提心皆是無常和尚却言是常此即相違令學人轉
加疑惑祖曰涅槃經吾昔者聽尼無盡藏讀誦一遍便為講說
無一字一義不合經文乃至為汝終無二說曰學人識量淺味
願和尚委由開示祖曰汝知否佛性若常更說甚麼善惡諸法

五灯二
二四
王

八倒常樂未入淨涅槃經才二四等一計常與常計與我計與不淨計與一計
常常計與常常計與
八倒
涅槃未了義教清涼大師於順宗皇帝所問諸經義云淨名涅槃經云積不依了義經不義經經經小乘教了義經者謂大乘教也

八集室曰方丈
又定唐顯慶
云策使西域
至與那城有維摩居士室以手板從橫量之得十笏故云方丈室

乃至窮劫無有一人發菩提心者故吾說無常正是佛說真常之道也又一切諸法若無常心者即物物皆有自性空受生死而真常性有不徧之處故吾說常者正是佛說真無常義也佛比為凡夫外道執於邪常諸二乘人於常計無常共成八倒故於涅槃了義教中破彼徧見而顯說真常真樂真我真淨汝今依言背義以斷滅無常及確定死常而錯解佛之圓妙最後微言縱覽千徧有何所益行昌忽如醉醒乃說偈曰因守無常心佛演有常性不知方便者猶春池拾礫我今不施功佛性而見前非師相授與我亦無所得祖曰汝今徹也宜名志徹師禮謝而去

信州智常禪師者本州貴谿人也髫年出家志求見性一日參六祖祖問汝從何來欲求何事師曰學人近禮大通和尚蒙示見性成佛之義未決狐疑至吉州遇人指迷令投和尚伏願垂

五打二

二十五

列

慈攝受祖曰彼有何言句汝試舉看吾與汝證明師曰初到彼三月未蒙開示以為法切於中夜獨入方丈禮拜哀請大通乃曰汝見虛空否對曰見彼曰汝見虛空有相貌否對曰虛空無形有何相貌彼曰汝之本性猶如虛空返觀自性了無一物可見是名正見無一物可知是名真知無有青黃長短但見本源清淨覺體圓明即名見性成佛亦名極樂世界亦名如來知見學人雖聞此說猶未決了乞和尚示誨令無疑滯祖曰彼師所說猶存見知故令汝未了吾今示汝一偈曰不見一法存無見大似浮雲遮日面不知一法守空知還如太虛生閃電此之知見瞥然興錯認何曾解方便汝當一念自知非自己靈光常顯見師聞偈已心意豁然乃述一偈曰無端起知解著相求菩提情存一念悟寧越昔時迷自性覺源體隨照在還流不入祖師室茫然返兩頭

善薩四
凡夫四
斷滅無常
執見外道
確之死常
常與外道

色計身

在我中乃至謂亦如

是一張計四九二

十過現未新業成

六十二

三際過現未

二過一如二過

仁王經劫火洞然大

千目海河弥巨海

唐書世錄

廣州志道禪師者南海人也。初參六祖問曰：學人自出家覽涅槃經，僅十餘載，未明大意。願和尚垂誨。祖曰：汝何處未了？對曰：諸行無常，是生滅法。生滅滅已，寂滅為樂。於此疑惑。祖曰：汝作麼生疑？對曰：一切眾生皆有二身，謂色身、法身也。色身無常有生有滅，法身有常無知無覺。經云：生滅滅已，寂滅為樂。若未審是何身寂滅，何身受樂？若色身者，色身滅時，四大分散，全是苦。苦不可言樂。若法身寂滅，即同草木瓦石，誰當受樂？又法性是生滅之體，五蘊是生滅之用。一體五用，生滅是常，生則從體起，用滅則攝用歸體。若聽更生，即有情之類，不斷不滅。若不聽更生，即求歸寂滅，同於無情之物。如是則一切諸法被涅槃之所禁伏，尚不得生，何樂之有？祖曰：汝是釋子，何習外道斷常邪見而議最上乘法？據汝所解，即色身外別有法身，離生滅求於寂滅。又推涅槃常樂，言有身受者，斯乃執各生死，耽著世樂。汝今

當知佛為一切迷人，認五蘊和合為自體，相分別一切法為外塵。相好生惡死，念念遷流，不知夢幻虛假，枉受輪迴。以常樂涅槃翻為苦相，終日馳求佛愍。此故乃示涅槃真樂，刹那無有生相。刹那無有滅相，更無生滅可滅。是則寂滅見前，當見前之時，亦無見前之量，乃謂常樂。此樂無有受者，亦無不受者。豈有一體五用之名？何況更言涅槃禁伏諸法，令永不生，斯乃謗佛毀法。聽吾偈曰：無上大涅槃，圓明常寂照。凡愚謂之死，外道執為斷。諸求二乘人，以無為作。盡屬情所計，六十二見本妄立。虛假名何為真實義？唯有過量人，通達無取捨。以知五蘊法及以蘊中我外現，眾色象下一音聲，相平等如夢幻。不起凡聖見，不作涅槃解。二邊三際斷，常應諸根用。而不起用，想分別一切法不起分別想。劫火燒海底，風鼓山相擊。真常寂滅樂，涅槃相如是。吾今彊言說，令汝捨邪見。汝勿隨言解，許汝知少分。師聞偈

一塵入正諸塵三
二出其觀體者只知一念即空不空非空非不空 第三語其
相應者心與空相應則譏毀讚譽何憂何喜身與空相應則刀
割香塗何苦何樂依報與空相應則施與劫奪何得何失心與
空不空相應則愛見都忘慈悲普救身與空不空相應則內同
枯木外現威儀依報與空不空相應則求絕貪求資財給濟心
與空不空非空非不空相應則實相初明開佛知見身與空不
空非空非不空相應則一塵入正受諸塵三昧起依報與空不
空非空非不空相應則香臺寶閣嚴土化生 第四警其上慢
者若不爾者則未相應也 第五誠其踈怠者然渡海應須上
船非船何以能渡修心必須入觀非觀無以明心心尚未明相
應何日思之勿自恃也 第六重出觀體者只知一念即空不
空非有非無不知即念即空不空非非有非非無 第七明其
是非者心不是有心不是無心不非有心不非無是有是無即

即理故次第八明事理不二即事而真用祛倒見也 勸友人

書第九事理既融內心自瑩復悲遠學虛擲寸陰故次第九明

勸友人書也 發願文第十勸友人雖是悲他專心在一情猶

未普故次第十明發願文誓度一切 復次觀心十門初則言

其法爾次則出其觀體三則語其相應四則警其上慢五則誠

其踈怠六則重出觀體七則明其是非八則簡其詮旨九則觸

途成觀十則妙契玄源 第一言法爾者夫心性虛通動靜之

源莫二真如絕慮緣計之念非殊感見紛馳窮之則唯一寂靈

源不狀鑒之則以千差千差不同法眼之名自立一寂非異慧

眼之號斯存理量雙銷佛眼之功圓著是以三諦一境法身之

理常清三智一心般若之明常照境智冥合解脫之應隨機非

縱非橫圓伊之道玄會故知三德妙性宛爾無乖一心深廣難

思何出要而非路是以即心為道者可謂尋流而得源矣 第

二出其觀體者只知一念即空不空非空非不空 第三語其

相應者心與空相應則譏毀讚譽何憂何喜身與空相應則刀

割香塗何苦何樂依報與空相應則施與劫奪何得何失心與

空不空相應則愛見都忘慈悲普救身與空不空相應則內同

枯木外現威儀依報與空不空相應則求絕貪求資財給濟心

與空不空非空非不空相應則實相初明開佛知見身與空不

空非空非不空相應則一塵入正受諸塵三昧起依報與空不

空非空非不空相應則香臺寶閣嚴土化生 第四警其上慢

者若不爾者則未相應也 第五誠其踈怠者然渡海應須上

船非船何以能渡修心必須入觀非觀無以明心心尚未明相

應何日思之勿自恃也 第六重出觀體者只知一念即空不

空非有非無不知即念即空不空非非有非非無 第七明其

是非者心不是有心不是無心不非有心不非無是有是無即

天台止觀云南岳師云相安其行與相安其行豈非就事理而如也之名特是也

六根識為悟入
故名有相見法
云引字胤音人
日十借音作胤
便引字胤音人
為可引引是發
之端亦可作引天
台教曰方便也
前教法者何金
方十般若也
釋中 莊子內
篇齊物注曰夫是
非之相與
宗故謂之環中
宗矣今之是非為
環而得其中者與
是非非之无文无
以能應夫是非
宗故應

隨是非有非無即隨非如是只是是非之非未是非是非之
是今以雙非破兩是是破非是猶是非又以雙非破兩非非破
非非即是是如是只是非是非非之是未是非不非不非是
不不是是非之惑綿微難見神清慮靜細而研之 第八簡其
詮且者然而至理無言假文言以明其旨自宗非觀藉修觀以
會其宗若旨之未明則言之未的若宗之未會觀之未深深觀
乃會其宗的言必明其旨自宗既其明會言觀何得復存邪
第九觸途成觀者夫再演言詞重標觀體欲明宗旨無異言觀
有逐言移移言則言理無差改觀則觀言不異不異之旨即理
無差之理即宗宗旨一而二名言觀明其弄引耳 第十妙契
玄源者夫悟心之士寧執觀而迷旨達教之人豈滯言而惑理
理明則言語道斷何言之能議言會則心行處滅何觀之能思
心言不能思議者可謂妙契環中矣先天二年十月十七日安

坐示滅塔于西山之陽蓋無相大師塔曰淨光

審宗

温州淨居尼玄機唐景雲中得度常習定於大日山石窟中一
日忽念曰法性湛然本無去住厭喧趨寂豈為達邪乃往叅雪
峯峯問甚處來曰大日山來峯曰日出也未師曰若出則銘却
雪峯峯曰汝名甚麼師曰玄機峯曰日織多少師曰寸絲不挂
遂禮拜退纔行三五步峯召曰袈裟角拖地也師回首峯曰大
好寸絲不挂 世傳玄機乃永嘉大師女弟嘗同遊方以景雲歲
日考之是矣第所見雪峯非真覺存也未嘉既到

曹溪必嶺下雪峯也
未詳法嗣故附於此

司空山本淨禪師者絳州人也姓張氏幼歲披緇于曹谿之室

受記隸司空山無相寺唐天寶三年玄宗遣中使楊光庭入山

探常春藤因造丈室禮問曰弟子慕道斯久願和尚慈悲略垂

開示師曰天下禪宗碩學咸會京師天使歸朝足可咨決貧道

隈山傍水無所用心光庭泣拜師曰休禮貧道天使為求佛耶

則八

弄引
付乃作
弄亂之

審宗

四生 卯生胎生
E化王
一類 法華隨喜
品若有形無形有
相與相非有相非
無相與無形之
無相與無形之

問道邪曰弟子皆識昏昧未審佛之與道其義云何師曰若欲
求佛即心是佛若欲會道無心是道曰云何即心是佛師曰佛
因心悟心以佛彰若悟無心佛亦不有曰云何無心是道師曰
道本無心無心名道若了無心無心即道光庭作禮信受既回
闕庭具以山中所遇奏聞即勅光庭詔師到京勅住白蓮亭越
明年正月十五日召兩街名僧碩學赴內道場與師闡揚佛理
時有遠禪師者抗聲謂師曰今對聖上校量宗旨應須直問直
答不假繁辭只如禪師所見以何為道師曰無心是道遠曰道
因心有何得言無心是道師曰道本無名因心名道心名若有
道不虛然窮心既無道憑何立二俱虛妄總是假名遠曰禪師
見有身心是道已否師曰山僧身心本來是道遠曰適言無心
是道今又言身心本來是道豈不相違師曰無心是道心泯道
無心道一如故言無心是道身心本來是道道亦本是身心身
心本既是空道亦窮源無有遠曰觀禪師形質甚小却會此理
師曰大德只見山僧相不見山僧無相見相者是大德所見經
云凡所有相皆是虛妄若見諸相非相即見其道若以相為實
窮劫不能見道遠曰今請禪師於相上說於無相師曰淨名經
云四大無主身亦無我無我所見與道相應大德若以四大有
主是我若有我見窮劫不可會道也遠聞語失色逡巡避席師
有偈曰四大無主復如水遇曲逢直無彼此淨穢兩處不生心
壅決何曾有二意觸境但似水無心在世縱橫有何事復云一
大如是四大亦然若明四大無主即悟無心若了無心自然契
道志明禪師問若言無心是道瓦礫無心亦應是道又曰身心
本來是道四生十類皆有身心亦應是道師曰大德若作見聞
覺知解會與道懸殊即是求見聞覺知之者非是求道之人經
云無眼耳鼻舌身意六根尚無見聞覺知憑何而立窳本不有

五灯二

卷二

三

論

金剛經

第五

遠巡
却退良
見善子致

十二分教
一、意唯覺 契經
二、祇夜 重頌
三、和伽羅那 授記
四、伽陀 誦誦
五、曼陀羅 曼陀羅
六、尼陀那 因緣
七、波陀那 譬喻
八、伊帝目多 本事
九、闍陀伽 本生
十、毘佛羅各 方廣
十一、阿浮陀達 未曾有
十二、優婆塞會 論議

第一莫向道
東抄言以已見
不語修道人
二事 東抄言
也

無相似此况 謂道
科也
到頭亦不寧 東抄
到頭畢竟也 寧
如此也
費休山居 以後
入翻也 廿年

何處存心焉得不同草木瓦礫明杜口而退師有偈曰見聞學
知無障礙聲香味觸常三昧如鳥空中只麼飛無取無捨無憎
愛若會應處本無心始得名為觀自在真禪師問道既無心佛
有心否佛之與道是一是二師曰不一不二曰佛度眾生為有
心故道不度人為無心故一度一不度何得無二師曰若言佛
度眾生道無度者此是大德妄生二見如山僧即不然佛是虛
名道亦妄立二俱不實揔是假名一假之中如何分二曰佛之
與道從是假名當立名時是誰為立若有立者何得言無師曰
佛之與道因心而立推窮立心心亦是無心既是無即悟二俱
不實知如夢幻即悟本空彊立佛道一名此是二乘人見解師
乃說無修無作偈曰見道方修道不見復何修道性如虛空虛
空何所修徧觀修道者撥火覓浮漚但看弄傀儡線斷一時休
法空禪師問佛之與道俱是假名十二分教亦應不實何以從

五十一

卷之二

三十一

是

前尊宿皆言修道師曰六德錯會經意道本無修大德彊修道
本無作大德彊作道本無事彊生多事道本無知於中彊知如
此見解與道相違從前尊宿不應如是自是大德不會請思之
師有偈曰道體本無修不修即合道若起修道心此人不會道
棄却一真性却入鬧浩浩忽逢修道人第一莫向道安禪師問
道既假名佛云妄立十二分教亦是接物度生一切是妄以何
為真師曰為有妄故將真對妄推窮妄性本空真亦何曾有故
故知真妄揔是假名二事對治都無實體窮其根本一切皆空
曰既言一切是妄妄亦同真真妄無殊復是何物師曰若言何
物何物亦妄經云無相似無比况言語道斷如鳥飛空安慙伏
不知所措師有偈曰推真真無相窮妄妄無形返觀推窮心知
心亦假名會道亦如此到頭亦只寧達性禪師問禪師至妙至
微真妄雙泯佛道兩亡修行性空名相不實世界如幻一切假

入翻也 廿年

攀緣楞伽經
注亦念也止觀才
三一謂可緣界

名作此解時不可斷絕衆生善惡二根師曰善惡二根皆因心
有窮心若有根亦非虛推心既無根因何立經云善不善法從
心化生善惡業緣本無有實師有偈曰善既從心生惡豈離心
有善惡是外緣於心實不有捨惡送何處取善令誰守嗚嗟二
見人攀緣兩頭走若悟本無心始悔從前咎又有近臣問曰此
身從何而來百年之後復歸何處師曰如人夢時從何而來睡
覺時從何而云曰夢時不可言無既覺不可言有雖有有無來
往無所師曰且道此身亦如其夢師有偈曰視生如在夢夢裏
實是鬧勿覺馬事休還同睡時悟智者會悟夢迷人信夢鬧會
夢如兩般一悟無別悟富貴與貧賤更無分別路上元二年歸
寂謚大曉禪師

玄策禪師者婺州金華人也遊方時屆于河朔有隍禪師者曾
謁黃梅自謂正受師知隍所得未真往問曰汝坐於此作麼隍

五月二

卷二

二十二

曰入定師曰汝言入定有心邪無心邪若有心者一切蠢動之
類皆應得定若無心者一切草木之流亦合得定曰我正入定
時則不見有有無之心師曰既不見有有無之心即是常定何
有出入若有出入則非大定隍無語良久問師嗣誰師曰我師
曹谿六祖曰六祖以何為禪定師曰我師云夫妙湛圓寂體用
如如五陰本空六塵非有不出不入不定不亂禪性無住離住
禪寂禪性無生離生禪想心如虛空亦無虛空之量隍聞此說
遂造于曹谿請決疑翳而祖意與師真符隍始開悟師後却歸
金華大開法席

河北智隍禪師者始參五祖雖嘗咨決而循乎漸行乃往河北
給庵長坐積二十餘載不見情容後遇策禪師激勸遂往參六
祖祖愍其遠來便垂開決師於言下豁然契悟前二十年所得
心都無影響其夜河北檀越士庶忽聞空中有聲曰隍禪師今

六塵
一色二声
三香四味
五觸六法

如人暗
雖不成入彩已
彰見仁王般若經

日得道也後回河北開化四眾

南陽慧忠國師者越州諸暨人也姓冉氏自受心印居南陽白

崖山黨子谷四十餘祀不下山道行聞于帝里唐肅宗上无二

年勅中使孫朝進賁詔徵赴京待以師禮初居千福寺西禪院

及代宗臨御復迎止光宅精藍十有六載隨機說法時有西天

大耳三藏到京云得他心通肅宗命國師試驗三藏纔見師便

禮拜立于右邊師問曰汝得他心通那對曰不敢師曰汝道老

僧即今在甚麼處曰和尚是一國之師何得却去西川看競渡

良父再問汝道老僧即今在甚麼處曰和尚是一國之師何得

却在天津橋上看弄胡孫師良父復問汝道老僧只今在甚麼

處藏罔測師叱曰這野狐精他心通在甚麼處藏無對僧問仰

耳三藏第三度為甚麼不見國師山曰前兩度是涉境心後入

自受用三昧所以不見又有僧問玄沙沙曰汝道前兩度還

見麼僧曰趙州大耳三藏第三度不見國師去審國師在甚麼

處鼻州云三藏鼻孔上僧後問玄沙既一日喚侍者者應諾如

是三召三應師曰將謂吾孤負汝却是汝孤負吾師問玄沙國

作麼生沙云却是侍者會雲居錫云且道侍者會不會若道會

國師又道汝孤負吾若道不會玄沙又道却且侍者會且作麼

生商量玄覺問僧甚麼處是侍者會處僧云若不會爭解恁

麼應玄覺云汝少會在又云若於這裏商量僧云去便識玄沙僧

問法眼國師喚侍者意作麼生眼云且去別時來雲居錫云法

眼恁麼道為復明國師意不明國師意僧問趙州國師喚侍

者意作麼生趙州云如人暗南泉到參師問廿麼處來曰江西

來師曰還將得馬師真來否曰只這是師曰且後底聲南泉便

休長慶稜云大似不知保福展云幾不到和尚此間雲居

錫云此二尊宿盡扶背後只如南泉休去口為當扶面前扶背後

麻谷到參繞禪床三匝振錫而立師曰汝既如是吾亦如是谷

又振錫師叱曰這野狐精出去上堂禪宗學者應遵佛語一乘

了義契自心源不了義者互不相許如師子身中蟲夫為人師

若涉名利別開異端則自他何益如世大匠斤斧不傷其手香

師子身中
香象
香象
香象

永嘉集悲智淨
福惠兩業

却當解脫曰作麼生得相應去師曰善惡一思自見佛性曰
若為得證法身師曰越毗盧之境界曰清淨法身作麼生得師
曰不著佛求耳曰阿那箇是佛師曰即心是佛曰心有煩惱否
師曰煩惱性自離曰豈不離邪師曰斷煩惱即名二乘煩惱
不生名大涅槃曰坐禪看靜此復若為師曰不垢不淨寧用起
心而看淨相問禪師見十方虛空是法身否師曰以想心取之
是顛倒見問即心是佛可更修萬行否師曰汝聖皆具二嚴豈
撥無因果邪又曰我今答汝窮劫不盡言多主道遠矣所以道
說法有所得斯則野干鳴說法無所得是名師子吼上堂青蘿
黃緣直上寒松之頂白雲淡泞出沒太虛之中萬法本閑而人
自鬧師問僧近離甚處曰南方師曰南方知識以何法示人曰
南方知識祇道一朝風火散後如蛇退皮如龍換骨本爾真性
宛然無畏師曰苦哉苦哉南方知識說法半生半滅曰南方知

五十一

李出

三十四

識即如是未審和尚此間說何法師曰我此間身心一如身外
無餘曰和尚何得將泡幻之身同於法體師曰你為甚麼入於
邪道曰甚麼處是某甲入於邪道處師曰不見教中道若以色
見我以音聲求我是人行邪道不能見如來南陽張漬行者問
承和尚說無情說法某甲未體其事乞和尚垂示師曰汝若問
無情說法解他無情方得聞我說法汝但聞取無情說法去漬
曰只約如今有情方便之中如何是無情因緣師曰如今一切
動用之中但凡聖兩流都無少分起滅便是出識不屬有無熾
然見覺只聞無其情識繫執所以六祖云六根對境分別非識
有僧到參禮師問蘊何事業曰講金剛經師曰最初兩字是甚
麼曰如是師曰是甚麼僧無對有人問如何是解脫師曰諸法
不相到當處解脫曰恁麼即斷去也師曰向汝道諸法不相到
斷甚麼師見僧來以手作圓相相中書日字僧無對師問本淨

緣空業

石佛也淨觀末 東抄也 卷之三 觀國街也

十身 清涼大經曰
言十身者自有三
一約即二世間五者
一眾生身二國土身三
業報身四畜生身
五緣有身六菩薩
身七如來身八如
九法身十虛空身
二就伴上自有十身
一善報身二願身三
化身四力持身五相
好莊嚴身六威勢
身七意生身八福
九身九法身十
智身

六字高僧傳云
湘潭者指耽原
之地也

禪師汝後見奇特言語如何淨曰無一念心愛師曰是汝屋
裏事肅宗問師在昔然得何法師曰陛下還見空中一片雲麼
帝曰見師曰釘釘着懸挂著帝又問如何是十身調御師乃起
立曰會麼帝曰不會師曰與老僧過淨瓶來帝又曰如何是無
諍三昧師曰檀越蹋毗盧頂上行帝曰此意如何師曰莫認自
己清淨法身帝又問師都不視之曰朕是大唐天子師何以殊
不顧視師曰還見虛空麼帝曰見師曰他還眨目視陛下否魚
軍容問師住白崖山十二時中如何修道師喚童子來摩頂曰
惺惺直言惺惺歷歷直言歷歷已後莫受人謾師與紫璘供奉
論議師陸座奉曰請師立義某甲破師曰立義竟奉曰是甚麼
義師曰果然不見非公境界便下座一日師問紫璘供奉佛是
甚麼義曰是覺義師曰佛曾迷否曰不曾迷師曰用覺作麼奉
無對奉問如是實相師曰把將虛底來曰虛底不可得師曰虛

五方

山

三十五

底尚不可得問實相作麼僧問如何是佛法大意師曰文殊堂
裏萬菩薩曰學人不會師曰大悲千手眼師以化緣將畢涅槃
時至乃辭代宗代宗曰師滅度後弟子將何所記師曰告檀越
造取一所無縫塔帝曰就師請取塔樣師良久曰會麼帝曰不
會師曰貧道去後有侍者應真却知此事乞詔問之大曆十年
十二月十九日右脇取塔于黨子谷蓋大證禪師代宗後詔
應真問前語真良久曰聖上會麼帝曰不會真述偈曰湘之南
潭之北中有黃金充一國無影樹下合同船瑠璃殿上無知識
西京荷澤神會禪師者襄陽人也姓高氏年十四為沙彌謁六
祖祖曰知識遠來大艱辛將本來否若有本則合識主試說看
師曰以無住為本見即是主祖曰這沙彌爭合取次語便打師
於杖下思惟曰大善知識歷劫難逢今既得遇豈惜身命自此
為侍他白祖告衆曰吾有一物無頭無尾無名無字無背無面

代宗

唐憲宗

諸人還識否師乃出曰是諸法之本源乃神會之佛性祖曰向汝道無名無字汝便喚作本源佛性師禮拜而退祖曰此子向後設有把茆蓋頭也為宗即師尋往西京受戒唐景龍年中却歸曹谿闕大藏經於只成得箇知解宗徒法眼云古人授記人終不錯如今立知解內亦處有疑問於六祖第一問戒定慧曰所用戒何物定從何處修慧因何處起所見不通流祖曰定即定其心將戒戒其行性中常慧照自見自知深第二問本無今有有何物本有今無無何物誦經不見有無義真似騎驢更覓驢祖曰前念惡業本無後念善生今有念念常行善行後代人天不久汝今正聽吾言吾即本無今有第二問將生滅却滅將滅滅却生不了生滅義所見似蘊首祖曰將生滅却滅令人不執性將滅滅却生令人心離境未即離二邊自除生滅病第四問先頓而後漸先漸而後頓不悟頓漸人心裏常迷悶祖曰聽法頓中漸悟法漸中頓修行頓中漸證果漸中頓頓漸是常因悟中不迷悶第五問先定後慧先慧後定定慧後初何生為正祖曰常生清淨心定中而有慧於境上無心慧中而有定定慧等無先雙修自心正第六問先佛而後法先法而後佛佛法本根源起從何處出祖曰說即先佛而後法聽即先法而後佛若論佛法本根源一切衆生心裏出祖滅後二十年間曹谿頓旨沈廢於荆吳高嶽漸門盛行於秦洛師入京天寶四年方定兩宗南能頓宗北秀漸教乃著顯宗記盛行於世一日鄉信至報二親亡師入堂白槌曰父母俱喪請大衆念摩訶般若衆纔集師便打槌曰勞煩大衆師於上光元年奄然而化塔于龍門

六祖下二世

南陽忠國師法嗣

吉州耽源山應真禪師為國師侍者時一日國師在法堂中師

符子
三昧岩對五言
供抄金遺葉方
百卷財後要急
方四美：中必有
符耳

久來國師乃放下一足師見便出良久却回國師曰適來意作
麼生師曰向阿誰說即得國師曰我問你師曰甚麼處見某甲
師又問百年後有人問極則事如何國師曰幸自可憐生須要
覓箇護身符子作麼異日師攜籃子歸方丈國師問籃裏甚麼
物師曰青梅國師曰將來何用師曰供養國師曰青在爭堪供
養師曰以此表獻國師曰佛不受供養師曰某甲只恁麼和尚
如何國師曰我不供養師曰為甚麼不供養國師曰我無果子
百丈海和尚在泐潭山牽車次師曰車在這裏牛在甚麼處丈
斫額師乃拭目麻谷問十二面觀音豈不是聖師曰是麻谷與
師一搥師曰想汝未到此境國師諱曰設齋有僧問曰國師還
來否師曰未具他心曰又用設齋作麼師曰不斷世諦

荷澤會禪師法嗣

沂水蒙山光寶禪師并州人也姓周氏初謁荷澤澤謂之曰汝
名光寶名以定體寶即已有光非外來縱汝意用而無少欠長
夜蒙照而無間歇汝還信否師曰信則信矣未審光之與寶同
邪異邪澤曰光即寶寶即光何有同異之名乎師曰眼耳緣聲
色時為復抗行為有回互澤曰抗互且置汝指何法為聲色之
體乎師曰如師所說即無有聲色可得澤曰汝若了聲色體空
亦信眼耳諸根及與凡與聖平等如幻抗行回互其理昭然師
由是領悟禮辭而去初隱沂水蒙山於唐元和二年圓寂

六祖下三世四世不列

六祖下五世

遂州圓禪師法嗣

終南山玉峯宗密禪師者果州西充人也姓何氏家本豪盛髫
鬢通儒書冠歲探釋典唐元和二年將赴貢舉偶造圃和尚法
席欣然契會遂求披剃當年進具一日隨外僧齋于府吏任灌

自唐何氏果州人
初得法於荷澤
上世孫道圓傳
覺於陸上得華
嚴句義於希僧
師為之誦清涼
經之曰思慮盡
能隨我遊者其
世乎

家居下位以受經得圓覺十二章覽未終軸感悟流涕歸以
所悟之旨告于圓圓撫之曰汝當大弘圓頓之教此諸佛授汝
耳行矣無自滯於一隅也師涕泣奉命禮辭而去因謁荆南忠
禪師補忠曰傳教人也當宣導於帝都復見洛陽照禪師奉國
照曰菩薩人也誰能識之尋抵襄漢因病僧付華嚴疏即上都
澄觀大師之所撰也師未嘗聽習一覽而講自欣所遇曰向者
諸師述作罕窮厥旨夫若此疏辭源流暢幽曠煥然吾禪遇南
宗教逢圓覺一言之下心地開通一軸之中義天朗耀今復偶
茲絕筆罄竭于懷暨講終思見疏主時屬門人大恭斷臂請恩
師先齋書上疏主遥叙師資往復慶慰尋大恭痊損方隨侍至
上都執弟子之禮觀曰毗盧華藏能隨我遊者其汝乎師預觀
之室惟日新其德而認空執象之患永亡矣北遊清涼山回住
郭縣草堂寺未幾復入終南圭峯蘭若大和中徵入內賜紫衣

三十八

帝果問法要朝士歸慕唯相國裴公休深入堂奧受教為外護
師以禪教學者互相非毀遂著禪源諸註寫錄諸家所述詮表
禪門根源道理文字句偈集為一藏或云百卷一以貽後代其都序
略曰禪是天竺之語具云禪那此云思惟修亦云靜慮皆定慧
之通稱也源者是一切眾生本覺真性亦名佛性亦名心地悟
之名慧修之名定定慧通名為禪此性是禪之本源故云禪源
亦名禪那理行者此之本源是禪理忘情契之是禪行故云理
行然今所集諸家述作多譚禪理少說禪行故且以禪源題之
今時有人但目真性為禪者是不達理行之旨又不辨華竺之
音也然非離真性別有禪體但眾生迷真合塵即名散亂背塵
合真方名禪定若直論本性即非真非妄無背無合無定無亂
誰言禪乎况此真性非唯是禪門之源亦是萬法之源故名法
性亦是眾生迷悟之源故名如來藏藏識出經亦是諸佛萬德

音觀勢至... 想觀水想觀地想觀空樹觀空池觀空樓觀空座觀空界觀空日

念佛三昧
般若經云無憶
故又名為三昧
般若三昧此云常
行三昧佛立三昧
般若一者後漢
文書也蓋此一部
三卷 天台止觀云
般若三昧翻云佛
三昧 有三義一佛
威神力二三昧力三
行者功德力能於
心中見十方佛在
其前也

之源故名佛性涅槃亦是菩薩萬行之源故名心地梵經云
本原行善隨道之根本也 萬行不出六波羅蜜禪者但是六中
之一當其第五豈可都目真性為一禪行哉然禪定一行最為
神妙能發起性上無漏智慧一切妙用萬行萬德乃至神通光
明皆從定發故三乘人欲求聖道必須修禪離此無門離此無
路至於念佛求生淨土亦修十六觀禪及念佛三昧般舟三昧
等也又真性即不垢不淨凡聖無差禪門則有淺有深階級殊
等謂帶異計欣上厭下而修者是外道禪正信因果亦以欣厭
而修者是凡夫禪悟我空偏真之理而修者是小乘禪悟我法
二空所顯真理而修者是大乘禪色上四類皆有四空之異也若頓悟自心
本來清淨元無煩惱無漏智性本自具足此心即佛畢竟無異
依此而修者是最上乘禪亦名如來清淨禪亦名一行三昧亦
名真如三昧此是一切三昧根本若能念念修習自然漸得百

一者四禪者一者禪
二者如前二者禪
三者戒禪
上觀才四三六二者
別而論之四禪四
空若後通說或云
一之對於戒禪
亦名靜致諸經教
隨用不定
三諦 光教志才
二五夫三諦者天
然之性德也中諦
者統一切法實諦
者依一切法俗諦
者立一切法
三止 一難真止
二方便隨緣止三
息二邊分別止

千三昧達磨門下展轉相傳者是此禪也達磨未到古來諸家
所解皆是前四禪八定諸高僧修之皆得功用南嶽天台令依
三諦之理修三止三觀教義雖最圓妙然其趣入門次第亦
只是前之諸禪行相唯達磨所傳者頓同佛體迥異諸門故宗
習者難得其旨得即成聖疾證菩提失即成邪速入塗炭先祖
革昧防失故且人傳一人後代已有所漸故任千燈千照洎乎
法久成弊錯謬者多故經論學人疑謗亦衆原夫佛說頓教漸
教禪開頓門漸門二教二門各相符契今講者偏彰漸義禪者
偏播頓宗禪講相逢胡越之隔宋密不知宿生何作熏得此心
自未解脫欲解他縛為法亡於驅命愍人切於神情亦如淨名
有德能解他縛無有是處然每歎人與法差法為人病故別撰
欲罷不能驗是宿習難改故經律論疏大開戒定慧門顯頓悟資於漸修證師說符於佛意
意既本末而垂示文乃浩博而難尋汎學雖多秉志者少况迹

一行三昧
名曰空教
三行即一切
行入心

前後息慮不絕
十年神源諸註
注前後者中初被
教道入內住城二年
方却表請願也
神偈偈畧
神源諸註向夫言
據畧者又至簡
約美須周足理
應操末多美在
又文中

一種教義
依性說相教
破相顯性教
真心即性教
三種法門
息妄修心宗
底絕无寄宗
直顯心性宗

亦如... 四智悲龍... 菩薩人不取涅槃而利生曰一也

涉名相誰辨金鑰徒自疲勞未見機感雖佛說悲增見行而自
慮愛見難防遂捨衆入山習定均慧前後息慮相繼十年微細
習情起滅彰於靜慧差別法義羅列現於空心虛隙日光纖埃
擾擾清潭水底影像昭昭豈比夫空守默之癡禪但尋文之狂
慧者也然本因了自心而辨諸教故懇情於心宗又因辨諸教
而解修心故虔誠於教義教也者諸佛菩薩所留經論也禪也
若諸善知識所述句偈也但佛經開張羅大千八部之衆禪偈
撮略就此方一類之機羅衆則莽蕩難依就機則指的易用今
之纂集意在斯焉裴休為之序曰諸宗門下皆有達人然各安
所習通少局多故數十年來師法益壞以承稟為戶牖各自開
張以經論為干戈互相攻擊情隨函矢而遷變周禮曰函人為
蓋所習之無使然也今學者但隨宗徒彼此相非耳法逐人我
以高低是非紛拏莫能辨析則向者世尊菩薩諸方教宗適足

以起淨後人增煩惱病何利益之有我圭峯大師久而歎曰吾

丁此時不可以默矣於是如來三種教義印禪宗三種法門
鎔餅盤釵釧為一金攪酥酪醍醐為一味振綱領而舉者皆順
而頓之云如振表領屈五指據會要而來者同趣周易略例云據
則六合輻湊未足多也散序據圓教尚恐學者之難明也又復
以印諸宗雖百家亦無所不統也

直示宗源之本末真妄之和合空性之隱顯法義之差殊頓漸
之異同遮表之回互權實之深淺通局之是非若吾師者捧佛
日而委曲回照疑懼盡除順佛心而橫亘大悲窮劫蒙益則世
尊為闡教之主吾師為會教之人本末相符遠近相照可謂畢
一代時教之能事矣或曰自如來未嘗大都而通之今一旦違
宗趣而不守廢關防而不據無乃垂祕藏密契之道乎答曰如
來初雖別說三乘後乃通為一道三十年前或說小乘或說空
各隨機證悟不相通知也四十年後坐靈鷲故涅槃經迦葉菩
而會三乘諸拘尸而顯一性前後之軌則也

善惡不思至一時
起用至至奉卷
華月乙之任款也

薩曰諸佛有密語無密藏世尊讚之曰如來之言開發顯露清

淨無翳愚人不能謂之祕藏智者了達則不名藏此其證也故

王道興則外戶不閉而守在戎夷佛道備則諸法總持而防在

魔外淫樂圓教和會諸法唯不當復執情攘臂於其間也師又

注釋師曰荷澤云見清淨體於諸三昧八萬四千諸波羅蜜門

皆於見上一時起用名為慧眼若當真如相應之時善惡不思

萬化寂滅萬法俱從思想緣念而生皆是虛空故云化也既此

時更無所見照體獨立三昧諸波羅蜜門亦一時空寂更無所

得散亂與三昧此岸與彼岸是相待對治之說若知心不審此

是見上一時起用否然見性圓明理絕相累即絕相為妙用生

問一問如何是道何以修之為復必須修成為復不假功用答

無礙是道覺妄是修道雖本因妄起為累妄念都盡即是修成

二問道若因修而成即是造作便同世間法虛偽不實成而復

壞何名出世答造作是結業名虛偽世間無作是修行即真實

出世三問其所修者為頓為漸漸則忘前失後何以集合而成

頓則萬行多方豈得一時圓滿答真理即悟而頓圓妄情息之

而漸盡頓圓如初生孩子一日而肢體已全漸修如長養成入

多年而志氣方立四問凡修心地之法為當悟心即了為當別

有行門若別有行門何名南宗頓旨若悟即同諸佛何不發神

通光明答識冰池而全水藉陽氣而鎔消惱凡夫而即真資法

力而修習冰消則水流潤方呈漑滌之功妄盡則心靈通始發

通光之應修心之外無別行門五問若但修心而得佛者何故

請經復說必須莊嚴佛土教化眾生乃名成道答鏡明而影像

不差心淨而神通萬應影像莊嚴佛國神通則教化眾生莊

三
四二

二種生死
名曰一陰二重易
三聖六道四辨名
既主死方便言執
界外辨名更易
生死

師曰一切衆生無不具有覺性靈明空寂與佛無殊但以無始劫來未曾了悟妄執身為我相故生愛惡等情隨情造業隨業受報生老病死長劫輪回然身中覺性未曾生死如夢被驅役而身本安閑如水作冰而濕性不易若能悟此性即是法身本自無生何有依託靈靈不昧了了常知無所從來亦無所去然多生妄執習以性成喜怒哀樂微細流注真理雖然頓達此情難以卒除須長覺察損之又損如風頓止波浪漸停豈可一生所修便同諸佛力用但可以空寂為自體勿認色身以靈知為自心勿認妄念妄念若起都不隨之即臨命終時自然業不能繫雖有中陰所向自由天上人間隨意寄託若愛惡之念已泯即不受分段之身自能易短為長易麤為妙若微細流注一切寂滅唯圓覺大智即然獨存即隨機應現千百億化身度有緣衆生名之為佛謹對釋曰馬鳴菩薩撮略百本大乘經宗曰

五 一 五 一 四 一 三

造大乘起信論論中立宗說一切衆生心有覺義不覺義覺中復有本覺義始覺義上所述者雖但約照理觀心處言之而法義亦同彼論謂從初至與佛無殊是本覺也從但以無始下是不覺也從若能悟此下是始覺也始覺中復有頓悟漸修從若能至亦無所去是頓悟也從然多生妄執下是漸修也漸修中從初發心乃至成佛有三位自在從初至隨意寄託者是受生自在也從若愛惡之念下是變易自在也從若微細流注下至未是究竟自在也又從但可以空寂為自體至自然業不能繫正是悟理之人朝暮行心修習止觀之要節也宗密先有八句之偈顯示此意曾於尚書處誦之奉命解釋偈曰作有義事是惺悟心作無義事是狂亂心狂亂隨情念臨終被業牽惺悟不由情臨終能轉業師會昌元年正月六日於興福院誡門人令昇屍施鳥獸焚其骨而散之勿得悲慕以亂禪觀每清明上山

講道七日其餘住持儀則當合律科違者非吾弟子言訖坐滅
道俗等奉全身于圭峯茶毗得舍利明白潤大後門人泣而求
之皆得於煨燼乃藏之石室暨宣宗再闢真教追謚定慧禪師
塔曰青蓮

五燈會元卷第二

西天東土應化聖賢附

文殊菩薩

天親菩薩

維摩大士

善財童子

須菩提尊者

舍利弗尊者

殃崛摩羅尊者

賓頭盧尊者

韋藏魔王

那叱太子

跋陀禪師

金陵寶誌禪師

雙林善慧大士

南嶽慧思禪師

天台智者禪師

泗州僧伽大聖

天台豐干禪師

天台寒山

天台拾得

明州布袋和尚

法華志言大士

扣冰澡先古佛

千歲寶掌和尚

文殊菩薩一日令善財採藥曰是藥者採將來善財徧觀大地
無不是藥却來白曰無有不是藥者殊曰是藥者採將來善財
遂於地上拈一莖草度與文殊文殊接得呈起示眾曰此藥亦
能殺入亦能活入文殊問菴提遮女曰生以何為義女曰生以
不生為生義殊曰如何是生以不生為生義女曰若能明
知地水火風四緣未嘗自得有所和合而能隨其所宜是為生

又曰此妙德大經
云云三句佛性猶如
妙德者在北方
喜世界作佛
喜藏摩尼寶積
如來新譯云受
殊室利此翻云妙
吉祥

名義集云唐言無親可僧伽西域記唐言無著初地菩薩天親之兄佛滅千年後弥沙塞部出家

義殊曰死以何為義女曰死以不死死為死義殊曰如何是死以不死死為死義女曰若能明知地水火風四緣未嘗自得有所離散而能隨其所宜是為死義菴提遮女問文殊曰明不生是不生之理為甚麼却被生死之所流轉殊曰其力未充

天親菩薩從彌勒內宮而下無著菩薩問曰人間四百年彼天為一晝夜彌勒於一時中成就五百億天子證無生法忍未審說甚麼法天親曰祇說這箇法祇是梵音清雅令人樂聞

維摩會上三十二菩薩各說不二法門文殊曰我於一切法無言無說無示無識離諸問答是為菩薩入不二法門於是文殊又問維摩仁者當說何等是菩薩入不二法門維摩默然文殊讚曰乃至無有語言文字是菩薩真入不二法門

善財參五十三負善知識末後到彌勒閣前見樓閣門閉瞻仰讚嘆見彌勒從別處來善財作禮曰願樓閣門開令我得入尋

五八

聖凡

四十五

時彌勒至善財前彈指一聲樓閣門開善財入已閣門即閉見百千萬億樓閣一一樓閣內有一彌勒領諸眷屬并一善財而立其前善財因無著菩薩問曰我欲見文殊何者即是財曰汝發一念心清淨即是無著曰我發一念心清淨為甚麼不見財曰是真見文殊

須菩提以此空生或云善財

須菩提尊者於巖中宴坐諸天雨花讚嘆者曰空中雨花讚歎復是何人云何讚嘆天曰我是梵天敬重尊者善說般若者曰我於般若未嘗說一字汝云何讚嘆天曰如是尊者無說我乃無聞無說無聞是真說般若尊者一日說法次帝釋雨花者乃問此花從天得邪從地得邪從人得邪釋曰弗也者曰從何得邪釋乃舉手者曰如是如是

舍利弗尊者因入城遙見月上女出城舍利弗心口思惟此姊見佛不知得忍不得忍否我當問之纔近便問大姊往甚麼處

百慧女

去女曰如舍利弗與麼去弗曰我方入城汝方出城何言如我
恁麼去女曰諸佛弟子當依何住弗曰諸佛弟子依大涅槃而
住女曰諸佛弟子既依大涅槃而住而我亦如舍利弗與麼去
舍利弗問須菩提夢中說六波羅密與覺時同異提曰此義深
遠吾不能說會中有彌勒大士汝往彼問舍利弗問彌勒是彌勒
云誰名彌勒誰是彌勒
以不轉女身天女曰何我從十二年來求女人相了不可得當何
所轉即時天女以神通力變舍利弗令如天女女自化身如舍
利弗乃問言何以不轉女身舍利弗以天女像而答言我今不
知云何轉面而變為女身

六欲天王幸教也

殃崛摩羅尊者未出家時外道受教為嬌尸迦欲登王位用千
人拇指為花冠已得九百九十九准欠一指遂欲殺母取指時
佛在靈山以天眼觀之乃作沙門在殃崛前殃崛遂釋母欲殺
佛佛徐行殃崛急行追之不及乃喚曰瞿曇住住佛告曰我住

聖賢

四一六

久矣是汝不住殃崛聞之心忽開悟遂弃刀投佛出家

賓頭盧尊者因阿育王內宮齋三萬大阿羅漢躬自行香見第
一座無人王問其故海意尊者曰此是賓頭盧位此人近見佛
來王曰今在何處者曰且待須臾言訖賓頭盧從空而下王請
就座禮敬者不顧王乃問承聞尊者親見佛來是否者以手策
起眉曰會麼王曰不會者曰阿耨達池龍王曾請佛齋吾是時
亦預其數

障蔽魔王領諸眷屬一千年隨金剛齊菩薩覓起處不得忽一
日得見乃問曰汝當依何而住我一千年覓汝起處不得齊曰
我不依有住而住不依無住而住如是而住

那吒太子捨肉還母析骨還父然後現本身蓮大神力為父母

說法

四譯八部般若也非特師六百卷

秦跋陀禪師問生法師講何經論生曰大般若經師曰作麼生

字
八集翻不

說色空義曰衆微聚曰色衆微無自性曰空師曰衆微未聚喚
作甚麼師固措師又問別講何經論曰大涅槃經師曰如何說
涅槃之義曰涅槃而不生槃而不滅不生不滅故曰涅槃師曰這
箇是如來涅槃那箇是法師涅槃曰涅槃之義豈有二邪某甲
祇如此未審禪師如何說涅槃師拈起如意曰還見麼曰見師
曰見箇甚麼曰見禪師手中如意師將如意擲于地曰見麼曰
見師曰見箇甚麼曰見禪師手中如意墮地師斥曰觀公見解
未出常流何得名喧宇宙拂衣而去其徒懷疑不已乃追師扣
問我師說色空涅槃不契未審禪師如何說色空義師曰不道
汝師說得不是汝師祇說得果上色空不會說得因中色空其
徒曰如何是因中色空師曰一微空故衆微空衆微空故一微
空一微空中無衆微衆微空中無一微

寶誌禪師初金陵東陽民朱氏之婦上巳日聞兒啼鷹巢中梯

樹得之舉以爲子七歲依鍾山大沙門僧儉出家專修禪觀宋
太始二年髮而徒跣著錦袍往來皖山劔水之下以剪尺拂子
拄杖頭負之而行天監二年梁武帝詔問弟子煩惑未除何以
治之答曰上上帝問其旨如何答曰在書字時節刻漏中帝益
不曉帝嘗詔畫工張僧繇寫師像僧繇下筆輒不自定師遂以
指勢回門分披出十二面觀音妙相殊麗或慈或威僧繇竟不
能寫他日與帝臨江縱望有物泝流而上師以杖引之隨杖而
至乃紫旃檀也即以屬供奉官俞紹令雕師像頃刻而成神采
如生師問一梵僧承聞尊者喚我作屠兒曾見我殺生麼曰見
師曰有見見無見見不有不無見若有見見是凡夫見無見見
是慧聞見不有不無見是外道見未審尊者如何見梵僧曰你
有此等見邪分勝曰不師垂語曰終日拈香擇火不知身是道
場又曰大道祇在目前要且目前難覩欲識大道真體不離聲

色言語。以京都鄴都浩浩。還是菩提大道。法眼曰京都鄴都浩浩不是菩提大道

善慧大士者。婺州義烏縣人也。齊建武四年丁丑五月八日。降

于雙林鄉。傳宣慈家。本名翕。年十六。納劉氏女。名妙光。生普建

普成。二子。二十四。與里人稽亭浦。獲魚。獲已。沈籠水中。祝曰。去

者。適止者。留人。或謂之愚。會有天竺僧高頭陀。曰。我與汝毗婆

尸佛。所發誓言。今兜率宮衣鉢。見在何日。當還。因命臨水。觀影。見

圓光寶蓋。大士笑。謂之曰。鑪鑪之所。多鈍鐵。良醫之門。足病人

度。生為急。何日彼樂乎。高指松山頂。曰。此可棲矣。大士躬耕而

居之。有人盜菽麥瓜果。大士即與籃籠。盛去。曰。此是作夜則行

道。見釋迦金粟定光三如來。放光襲其體。大士乃曰。我得首楞

嚴定。天嘉二年。感七佛相隨。釋迦引前。維摩接後。唯釋尊數額

共語。為我補處也。其山頂黃雲盤旋。若蓋。因號雲黃山。梁武帝

請講金剛經。士纔陞座。以尺揮按。一下。便下座。帝愕然。聖師曰。

陛下還會麼。帝曰。不曾。聖師曰。大士講經竟。又一日。講經。次帝

至。大眾皆起。唯士端坐不動。近臣報曰。聖駕在此。何不起。士曰。

法地若動。一切不安。大士一日披衲頂冠。鞞履。朝見。帝問。是僧

邪。士以手指冠。帝曰。是道邪。士以手指鞞履。帝曰。是俗邪。士以

手指衲衣。大士心玉銘曰。觀心空王。玄妙難測。無形無相。有大

神力。能滅千劫。成就萬德。體性雖空。能施法則。觀之無形。呼之

有聲。為大法將。心戒傳經。水中鹽味。色裏膠青。決定是有。不見

其形。心王亦爾。身內居停。面門出入。應物隨情。自在無礙。所作

皆成了。本識心識。心見佛。是心是佛。是佛是心。念念佛心。佛心

念佛。欲得早成。戒心自律。淨律淨心。心即是佛。除此心王。更無

別佛。欲求成佛。莫染一物。心性雖空。貪嗔體實。入此法門。端坐

成佛。到彼岸。已得波羅蜜。慕道真士。自觀自心。知佛在內。不向

外尋。即心即佛。即佛即心。心月識佛。曉了識心。離心非佛。離佛

首楞嚴定

大經二十五一切眾生

皆悉各有

首楞嚴定之名

若亦名金剛三昧

亦名師子吼亦名佛

性之般若師子吼

從惠鳥名金剛首

楞嚴從定之名

出轉行

楞嚴此云健川

教義合之先盡

又小兒履也

天台山修禪寺智者禪師諱智顛荆州華容陳氏子在南嶽誦法華經至藥王品曰是真精進是名真供養如來於是悟法華三昧獲旋陀羅尼見靈山一會儼然未散

泗州僧伽大聖或問師何姓師曰姓何曰何國人師曰何國人

天台山豐干禪師因寒山問古鏡未磨時如何照燭師曰冰壺

無影像猿猴探水月曰此是不照燭也更請道看師曰萬德不

將來教我道甚麼寒山拾得俱不禮而退師欲遊五臺問寒山

拾得曰汝共我去遊五臺使我同流若不共我去遊五臺不

是我同流山曰你去遊五臺作甚麼師曰禮文殊山曰你不是

我同流師尋獨入五臺逢一老人便問莫是文殊麼曰豈可有

二文殊師作禮未起忽然不見趙州代曰文殊文殊

天台山寒山子因衆僧多茹次將茹串向一僧背上打一僧

回首山呈起茹串曰是甚麼僧曰這風顛漢山向傍僧曰你道

這僧費却我多少鹽醋因趙州遊天台路次相逢山見牛跡問

州曰上座還識牛麼州曰不識山指牛跡曰此是五百羅漢遊

山州曰既是羅漢爲甚麼却作牛去山曰蒼天蒼天州呵呵大

笑山曰作甚麼州曰蒼天蒼天山曰這厮兒窻有八人之作

天台山拾得子一日掃地寺主問汝名拾得因豐干拾得汝歸

汝畢竟姓箇甚麼拾得放下掃帚叉手而立主再問拾得拈掃

帚掃地而去寒山搥背曰蒼天蒼天拾得曰作甚麼山曰不見

道東家人死西家人助哀二人作舞笑哭而出國清寺半月念

戒衆集拾得拍手曰聚頭作想那事如何維那吐之得曰大德

且住無嗔即是戒心淨即出家我性與你合一切法無差

明州奉化縣布袋和尚自稱契此形裁臞鳩罪腰奴罪切覺罪額罪瞠

腹出語無定寢卧隨處常以杖荷一布囊并破席凡供身之具

盡貯囊中入鄞肆聚落見物則乞或醢醢魚菹纒接入口分少

東抄謂月中水如蘇提水中元與日不可得而招也

任情孤 東抄下
万之象

許投囊中時號長汀子一日有僧在師前行師乃拊其背僧回
首師曰乞我一文錢曰道得即與汝一文師放下布袋又手而
止白鹿和尚問如何是布袋師便放下布袋曰如何是布袋下
事師負之而去先保福和尚問如何是佛法大意師放下布袋
义手福曰為祇如此為更有向上事師負之而去師在街衢立
有僧問和尚在這裏作甚麼師曰等箇人曰來也來也歸宗乘和尚別
去歸師曰汝不是這箇人曰如何是這箇人師曰乞我一文錢
師有歌曰祇箇心心是佛十方世界最靈物縱橫妙用可憐
生一切不如心真實騰騰自在無所為閑閑究竟出家兒若覩
目前真大道不見纖毫也大奇萬法何殊心何異何勞更用尋
經義心王本自絕多知智者祇明無學地非聖非凡復若乎不
疆分別聖情孤無價心珠本圓淨凡是異相妄空呼人能弘道
道分明無量清高稱道情携錫若登故國路莫忘諸處一聞聲

聖真月

五十一

列

若乎情
如若為

自字頌 東抄言
山中歸去之路也

又有偈曰是非潛愛世偏多了細思量奈我何竟却肚腸須忍
辱豁開心地任從他若逢知己須依分縱遇冤家也共和若能
了此心頭事自然證得六波羅我有一布袋虛空無罣礙展開
遍十方入時觀自在吾有三寶堂裏空無色相不高亦不低無
遮亦無障學者體不如空者難得樣智慧解安排千中無一匠
四門四果生十方盡供養吾有一軀佛世人皆不識不塑亦不
裝不雕亦不刻無一滴灰泥無一點彩色人畫畫不成賊偷偷
不得體相本自然清淨非拂拭雖然是一軀分身千百億又有
偈曰一鉢千家飯孤身萬里遊青目覩人少問路白雲頭梁貞
明三年丙子三月師將示滅於岳林寺東廊下端坐磐石而說
偈曰彌勒真彌勒分身千百億時時示時人時人自不識偈畢
安然而化其後復現于他州亦負布袋而行四眾競圖其像
法華志言大士壽春許氏子弱冠遊東都繼得度於七俱胝院

果貞明
三年
後果
帝年

而涉及口動也 需 俱切 需 多言也 玉篇

王質字子柱又
正之姓也其在相
門其驕并華道
馬室二宗朝歷
蔡州廬州荆
南教司可至有
水壽木声 排之頁

留講肆之久一日讀雲門錄忽契悟未幾宿命遂通獨誦契口
吻嘯嘯日常不輟世傳誦法華因以名之丞相呂許公問佛法
大意師曰本來無一物一味却成真集仙王質問如何是祖師
西來意師曰青山影裏潑藍起寶塔高吟撼曉風又曰請法華
燒香師曰未從齋戒覓不向佛邊求國子助教徐岳問祖師西
來意師曰街頭東畔底徐曰某甲未會師曰三般人會不得僧
問世有佛不師曰寺裏又殊有問師凡邪聖邪遂舉手曰我不
在此住慶曆戊子十一月二十三日將化謂人曰我從無量劫
來成就逝多國土分身劫化今南歸矣言畢右脇而逝

扣冰澡先古佛建寧新豐翁氏子母夢比丘風神炯然荷錫求
宿人指謂曰是辟支佛已而孕生於武宗會昌四年香霧滿室
彌日不散年十三求出家父母許之依烏山興福寺行全為師
火通乙酉落髮受具初以講說為業所歸棄謁雪峯手携烏菟
一色醬一器獻之峯曰包中是何物師曰鳧菟峯曰何處得來

師曰泥中得峯曰泥深多少師曰無丈數峯曰還更有麼曰轉
有轉深又問器中何物曰醬譬何處得來曰自台得譬還熟也
未曰不較多峯異之曰子異日必為王者師後白鵝湖歸温嶺
結庵今為永豐寺繼居將軍殿一虎侍側神人獻地為瑞巖院學者
爭集嘗謂眾曰古聖修行須憑苦節吾今夏則衣猪冬則扣冰

而浴故世人號為扣冰古佛後住靈曜上堂四眾雲臻教老僧
說箇甚麼便下座有僧燒炭積成火龕曰請師入此修行曰真
玉不隨流水化琉璃爭奪眾星明日莫抵這便是麼曰且莫認
奴作郎曰畢竟如何曰梅花臘月開天成戊子應閩主之召延
居內堂敬拜曰謝師遠降賜茶次師提起素子曰大王會麼曰
不會曰人王法王各自照了留十日以疾辭至十一月二日沐
浴陞堂告眾而逝王與道俗備香薪蘇油茶毗之祥耀滿山獲

設利五色塔於瑞巖正寢謚曰妙應法威慈濟禪師

千歲寶掌和尚中印度人也周威烈十二年丁卯降神受質左手握拳七歲祝髮乃展因名寶掌魏晉間東遊此土入蜀禮普賢留大慈常不食日誦般若等經千餘卷有詠之者曰勞勞王齒寒似迸巖泉急有時中夜坐塔前神鬼泣一日謂衆曰吾有願住世千歲今年六百二十有六故以千歲稱之次遊五臺徙居祝融峯之華嚴黃梅之雙峯廬山之東林尋抵建鄴會達磨入梁師就扣其目開悟武帝高其道臘延入內庭未幾如吳有偈曰梁城遇導師參禪了心地飄零二浙遊更盡佳山水順流東下由千頃至天竺往鄮峯登太白穿鴈蕩盤礴於翠峯七十二庵回赤城慈雲門法華諸暨漁浦赤符大巖寺處返飛來棲之石竇消行盡支那四百州此中偏稱道人遊之句時貞觀十五年也後居浦江之寶嚴與師俾師友善每通問遣白牛馳往別亦以青猿為使今故題朗壁曰犬街書至青猿洗鉢回師所經處後皆成寶坊顯慶二年正月手塑一像至九日像成問其徒慧雲曰此肖誰雲曰與和尚無異即澡浴衣跣坐謂雲曰吾住世已一千七十二年今將謝世聽吾偈曰本來無生死今亦示生死我得去住心他生復來此頃時囑曰吾滅後六十年有僧來取吾骨勿拒言訖而逝入滅五十四年有刺浮長老自雲門至塔所禮曰冀塔洞開少選塔戶果啓其骨連環若黃金淨即持往秦望山建窠堵波奉藏以周威烈丁卯至唐高宗顯慶丁巳張之寶一千七十二年抵此土歲歷四百餘僧史皆失載開元中慧雲門人宗一者嘗勒石識之

